

# 里前遺跡（第3・4次）発掘調査報告

2006（平成18）年12月

三重県埋蔵文化財センター



# 序

三重県津市は、南北に広がる伊勢平野の中央部に位置し、安濃川によって形成された肥沃な土壤により、古来より人々の生活の痕跡が認められる地域であります。安濃川の河口には、福岡県の博多津、鹿児島の坊津とともに日本三大津として知られる安濃津が存在し、海運交通の拠点として栄えた港町でありました。

さて、本書は、三泗川河川改修工事に先立って調査されました里前遺跡の第3次調査の発掘調査報告です。第1次調査では、河の落ち込み部分に膨大な数の陶器類が投棄されているのが確認され、これらの陶器が、現在の愛知県で生産されたものであることや、三泗川と岩田川が合流するという地点であるということから、中世の物流の要所であった可能性があり、当時の物流・水上交通を探るうえで重要な発見となりました。今回の調査では、当時使用されていたとみられる木組の井戸が極めて良好な状態で出土し、この周辺における人々の生活の痕跡を確認することができました。

工事によって、残念ながらこれらの遺構は消滅いたしましたが、これらの調査によってこの地域の歴史像解明の一助となれば幸いです。

最後に調査にあたっては関係諸機関および地元のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成18年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



# 例　言

- 1 本書は三重県津市野田字里前に所在する里前遺跡及び字梁瀬に所在する梁瀬遺跡の報告書である。
- 2 発掘調査は以下の体制の体制は以下の通りである。

## 〔里前遺跡〕

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究 I グループ 筒井正明・豊田祥三 研修員 野田有美

発掘作業 安西工業株式会社

## 〔梁瀬遺跡〕

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究 I 課 萩原義彦

- 3 里前遺跡の遺構・遺物写真は豊田祥三が撮影し、本文の執筆も豊田が行った。また、梁瀬遺跡については、萩原義彦が担当し、全体の編集は豊田が担当した。
- 4 本書が対象とした実調査面積は、以下のとおりである。

里前遺跡 9 8 8 m<sup>2</sup>

梁瀬遺跡 4 0 m<sup>2</sup>

- 5 本書が対象とした現地調査期間は、下記のとおりである。

里前遺跡 平成14年8月5日から平成14年10月18日

梁瀬遺跡 平成18年5月11日

- 6 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の各氏・機関から有益なご教示等を得ました。記して感謝の意を表します。(所属は当時)  
小林俊之(津市教育委員会) 藤澤良祐(愛知学院大学) 吉田生物(株)(順不同・敬称略)
- 7 本書が扱う発掘調査の原因事業は、三泗川改修事業である。
- 8 本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡 例

### (地図類)

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、津市都市計画図である。
2. これらの地図類は本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系を用いており、平成14年4月から施行されている世界測地系には対応していない。
3. 挿図の方針はすべて座標北で示している。なお真北は座標北の西偏 $0^{\circ}16'$ 、磁北は座標北の西偏 $6^{\circ}40'$ である。

### (遺構類)

1. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社1967年初版)を用いた。
2. 本書での遺構は連番となっている。  
遺構の性格については、遺構表示略記号を用いて表示した。

SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SZ：落ち込み Pit：柱穴

### (遺物類)

1. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺については、その都度指示している。
2. 遺物実測図は、遺跡・調査次数毎でそれぞれまとめられており、全体としては通番ではない。
3. 遺物観察表は以下の要領で記載している。

報告書番号…挿図掲載番号である。 実測番号…実測段階の登録番号である。 器種…遺物の器種を示す。 グリット…調査時に設定したグリット名を記した。 遺構…遺物の出土した遺構や層名を記した。 法量 (cm) …遺物の法量を示す。 口径は口縁部径、底部は底部径、器高は遺物の高さを示す。 なお、数値はそれぞれの部位の最大径である。

調整・技法の特徴…おもな特徴を内面(内:) 外面(外:) で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。 色調…その遺物の代表となる色調を記載した。 表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示し、分子の数値のみ記した。 6は約半分、全体が残っているものは完存と記した。

# 本文目次

I 前言 .....	(1)
1 調査に至る経緯	
2 調査の経過	
3 調査の記録と方法について	
4 文化財保護法にかかる諸通知	
5 整理作業とその方法	
II 位置と環境 .....	(3)
1 地理的位置	
2 歴史的環境	
III 調査の成果 .....	(6)
1 調査区の地形と基本層位	
2 遺構	
3 遺物	
IV 結語 .....	(30)
1 遺跡の動向について	
2 井戸について	
3 出土土器の傾向	
4 里前遺跡の評価について	
附編1 里前遺跡（第4次）発掘調査概要 .....	(47)
1 調査の経緯	
2 位置と環境	
3 遺構・遺物	
4 まとめ	
附編2 梁瀬遺跡工事立会報告 .....	(50)
1 位置と環境	
2 遺構	
3 遺物	
4 まとめ	

## 挿図一覧

第1図	遺跡位置図	4
第2図	里前遺跡調査区位置図	5
第3図	事業地内調査区位置図	6
第4図	調査区遺構平面図	7-8
第5図	調査区東壁土層断面図	9
第6図	井戸SE184平面・断面図	10
第7図	井戸SE182平面・断面図	11
第8図	河道SR176土層断面図	12
第9図	出土遺物実測図(1)	15
第10図	出土遺物実測図(2)	16
第11図	出土遺物実測図(3)	17
第12図	出土遺物実測図(4)	18
第13図	出土遺物実測図(5)	19
第14図	出土遺物実測図(6)	20
第15図	出土遺物実測図(7)	21
第16図	出土遺物実測図(8)	22
第17図	出土遺物実測図(9)	23
第18図	出土遺物実測図(10)	24
第19図	里前遺跡調査区と周辺の試掘状況図	30
第20図	木組井戸横棟の組方模式図	31
第21図	井戸SE184組方模式図	31
第22図	調査区位置図	47
第23図	遺構平面・断面図	48
第24図	遺跡位置図	50
第25図	出土遺物実測図	51

## 表目次

第1表	出土遺物観察表(1)	25
第2表	出土遺物観察表(2)	26
第3表	出土遺物観察表(3)	27
第4表	木製品観察表(1)	28
第5表	木製品観察表(2)	29
第6表	里前遺跡(第3次)遺構一覧表	29
第7表	里前遺跡周辺調査一覧	32
第8表	出土遺物観察表	51

## 図版目次

図版1	里前遺跡遺構(1)	35
図版2	里前遺跡遺構(2)	36
図版3	里前遺跡遺構(3)	37
図版4	里前遺跡遺構(4)	38
図版5	里前遺跡遺構(5)	39
図版6	里前遺跡遺構(6)	40
図版7	里前遺跡遺物(1)	41
図版8	里前遺跡遺物(2)	42
図版9	里前遺跡遺物(3)	43
図版10	里前遺跡遺物(4)	44
図版11	里前遺跡遺物(5)	45
図版12	里前遺跡遺物(6)	46
図版13	里前遺跡(第4次)遺構	49

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯

津市南河路周辺は、旧来から条里制地割が残存し、旧地形が残存している地域であるが、近年の圃場整備や道路建設に伴う開発のため消滅しつつある。三泗川についても、護岸工事等が行われておらず、今回、中勢バイパス建設に連動し、河川の改修を行うこととなった。

当埋蔵文化財センターでは、平成12年12月に事業予定地内に2m×4mを基本として試掘坑を設定し、調査を実施したところ、溝・土坑・落ち込み等の遺構や土師器鍋・山茶椀・陶器片等の土器を確認したため988m<sup>2</sup>の範囲で発掘調査が必要という判断に至った。

## 2 調査の経過

本調査は988m<sup>2</sup>について実施した。発掘調査の発掘作業部門は、安西工業株式会社が受託し、8月5日から重機によって表土の掘削を始めたが、調査区東半分は畠地で、農作物の収穫が済んでおらず、耕作の終了を待っての調査となつたため、西側部分のみを先に掘削し、その後、東側の調査を行っている。従つて西側終了ののち、東側の調査開始まで一時的に中断している。

調査区は、風通しの悪い箇所にあり、夏場は猛烈な暑さであったが、掘削は順調に進み、一次的な中断を挟み、10月22日に終了することができた。

### 〔調査日誌抄〕

- 8月5日 調査区の掘削前の段階確認（企画調整・森山）ののち重機による耕作土剥ぎ開始。  
8月6日 表土剥ぎの続き。調査区の北側を試し掘りしたところ、三泗川への傾斜部分を近世に耕地にするため盛土したことが判明した。  
8月7日 表土剥ぎ終了。地区杭設定。  
8月9日 段階確認（森山）  
8月19日 作業開始。  
8月21日 SD170の断ち割りを行う。  
8月22日 遺構掘削。川の落ち込み確認のため、断ち割り  
8月23日 降雨のため作業途中で中止。

- 8月27日 作業開始まもなく降雨のため中止。  
8月28日 降雨のため作業中止。  
8月30日 降雨のため作業中止。  
9月2日 午前、土木と調査区東部についての打ち合わせ。  
9月5日 調査区東部の掘削前の段階確認。（森山）  
9月6日 降雨のため作業中止。  
9月9日 東部表土掘削開始。  
9月10日 調査区西部の掘削終了。  
9月18日 表土剥ぎ終了。  
9月19日 東部表土剥ぎ後の段階確認。（森山）  
9月20日 東部掘削開始  
9月26日 降雨のため作業途中で中止。  
9月27日 降雨のため中止。  
9月30日 降雨のため中止。  
10月1日 またも中止！  
10月2日 ようやく雨も上がり、調査区水抜き。  
10月4日 午前中に調査区全景写真。午後、土層断面図作成。  
10月7日 遺構平面実測を開始。（黒田聖也・瀬野弥知世）  
10月8日 遺構平面実測（瀬野弥知世・辻本泰宏）  
10月10日 実測終了。（掘削後の段階確認・森山）  
10月15日 井戸の断ち割りを重機でおこなう。  
SE182・184から井戸枠出土！  
10月18日 井戸の木組みを取り外し・取り上げながら、井戸の断面図作成。  
SE182・184とも曲物良好に残存しており、断面図作成の後、取り上げ。  
調査終了！

## 3 調査の記録と方法について

### a 土工部門委託について

今回の発掘調査にあたっては、調査の迅速化と、調査員が調査に専念できるようにするために、土工部門を競争入札により委託している。当遺跡の調査では安西工業株式会社が受託し実施した。

### b 掘削の方法について

掘削は表土・無遺物層については重機によって掘

削し、遺構を人力で掘削した。また、調査の最後に行つた井戸の断ち割りについても重機掘削による。

#### c 調査区の設定について

調査区は、4m四方の枠目で切ることにより小地区を設定した西から数字、南からアルファベットを付けた。

#### d 遺構図面について

遺構の平面・土層断面の実測図については1/20で手書きによる実測を行つてある。

### 4 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行つてある。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成12年5月29日付け農基第320号

・法第58条の2第1項（県教育長宛）

平成14年6月26日教埋第89号

・遺失物法による文化財発見・届出通知

（警察署長宛）

平成14年12月24日付教ス生第8-9号

（県教育長通知）

### 5 整理作業とその方法

#### a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した平成14年度中に、発掘調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業を行い、未掲載遺物については、袋詰にし、整理箱に収納したあとに、専用収蔵庫へと収納した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

#### b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、平成15~16年度に報告書作成のための観察や図版作成を行つた。これらの遺物は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものは記録保存の一環で保存しているが、報告書用に作成した版下類やトレース図版については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×9版（ブ

ローニ）で撮影した。遺物写真の撮影は報告書掲載資料すべてではなく、掲載資料のうちの主だったものとした。

実測図の作成は、平成15年に遺物写真撮影と図版作成、および遺物の収蔵については平成16年度に実施した。

#### c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで所蔵している。

## II 位置と環境

### 1 地形的環境

里前遺跡<sup>①</sup>（1）の所在する地は、安濃川の形成した沖積地に位置する。安濃川は、津市南河道付近で大きく北側に蛇行する。南河路のやや西には「さんし」と呼ばれるやや低い箇所があり、近世に藤堂高虎が津入城した際、城下を洪水から守るため、大洪水の際はここを切って岩田川の方へ水を流すようにした<sup>②</sup>という。以上のような伝承からも、三泗川は安濃川の水量調整の役割を担ったものと考えられる。

三泗川は安濃川から分流し、岩田川に合流するが、里前遺跡はちょうど三泗川が岩田川に合流する地点に位置し、陸路としても北に位置する。南河路には、津から布引山地を長野峠経由で超え伊賀に至る「伊賀街道」が通り、現在の国道163号線と同様のルートで、遺跡の周辺を北から迂回するようなかたちでまわり、西側へむかう。このように、遺跡周辺は水陸双方の交通の要所であったことは遺跡の性格を考えうえで重要な事項である。

### 2 歴史的環境

里前遺跡周辺では、近年圃場整備や国道・県道の建設工事などに伴う発掘調査が多く、安濃川右岸の様相を知る重要な発見が多く報告<sup>③</sup>されている。

歴史的環境については各報告書にて再三触れられており、ここでは重複を避け、主に古代末・中世以降を中心に簡単に触れておくこととする。

安濃川右岸に広がる沖積地一帯には、条里制の地割が残存している。

10・11世紀における当地域を認識するうえで重要なことは、伊勢神宮領である御厨の存在である。神宮雑例集<sup>④</sup>には「野田御園」とみえ、「神鳳鈔」<sup>⑤</sup>には「野田御厨」とあり、安濃郡内では成立の早い御園である。現在までのところ、これに関連するような遺構などは確認されていないが、注意すべき事項である。

中世の集落遺跡としては安濃川左岸に位置する位田・蔵田遺跡（4）、右岸の替田（3）・武ノ坪遺跡（2）などが挙げられる。中でも位田遺跡（5）では屋敷地や、道路遺構に加え緑釉陶器や碁石が出土

し、官的な性格を有した人物の館跡と考えられている。神戸遺跡では平安時代中期の掘立柱建物が条里に沿って確認され、武ノ坪遺跡でも平安時代前期とみられる掘立柱建物が条里方向に並んで見つかっている。公的な施設の可能性が考えられている。

また、岩田川のやや上流の殿村には伊勢平氏発生伝説地といわれる「忠盛塚」が所在する。平氏の伊勢における活動は、おもに北勢・一志とする見解がある一方、近年、岩田川河口には中世の港町として著名な安濃津（9）が存在し、山茶椀をはじめとした尾張産陶器の集積地として機能していたと考えられており、遺跡の南である久居市戸木町に所在する上野遺跡<sup>⑥</sup>（10）、雲出島貫遺跡<sup>⑦</sup>（11）を始めとした中世集落・居館の発見などからも、伊勢平氏が物資の運搬に関連していた可能性が指摘<sup>⑧</sup>されている。里前遺跡の第1次調査では墨書き土器や使用痕のないものを含んだ大量の山茶椀が出土しているおり、当遺跡の性格の評価のみならず、当時の物流を考えうえで重要な事項である。

#### [註]

①川崎志乃『里前遺跡発掘調査報告』（「一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う」三重県埋蔵文化財センター 2002年）  
水谷豊・酒井巳紀子ほか『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2005年）

②小玉道明ほか『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道—歴史の道調査報告書一』（三重県教育委員会1983年）

③各報告については、第7表の里前遺跡周辺調査一覧を参照されたい

④『群書類従』

⑤『群書類従』

⑥久居市教育委員会『上野遺跡だより』

⑦伊藤裕偉『嶋抜Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）

⑧伊藤裕偉「安濃津の成立とその中世的展開」（『日本史研究』448 1999年）



- |         |         |           |
|---------|---------|-----------|
| 1 里前遺跡  | 5 位田遺跡  | 9 安濃津遺跡群  |
| 2 式ノ坪遺跡 | 6 納所遺跡  | 10 上野遺跡   |
| 3 替田遺跡  | 7 松ノ木遺跡 | 11 雲出島貫遺跡 |
| 4 蔵田遺跡  | 8 森山東遺跡 | 12 鎌切遺跡   |

第1図 遺跡位置図



第2図 里前遺跡調査区位置図 (1:4,000)

### III 調査の成果

## 1 調査区の地形と基本層位

第3次調査として今回報告する調査区は三泗川と岩田川が合流する地点から三泗川沿いに北にあがった箇所である。

調査区の現況は耕作地で、表土下に灰黄色シルト質細砂が検出でき、これが遺構基盤面となる。この基盤面は東にいくほど下がっていき、調査区東側と西側との高低差は約70cmに及ぶ。土層断面の観察の結果、調査区内の北半分は三泗川の落ち込みで、近世に畠にするため人為的に盛土がなされたことが判明した。

2 遺構

今回の調査では、鎌倉時代から近世までの遺構を検出した。以下、主だった遺構について記述する。

井戸SE184（第7図） 調査区中央部のB12グリットで検出した遺構である。SR176のかたに位置する。

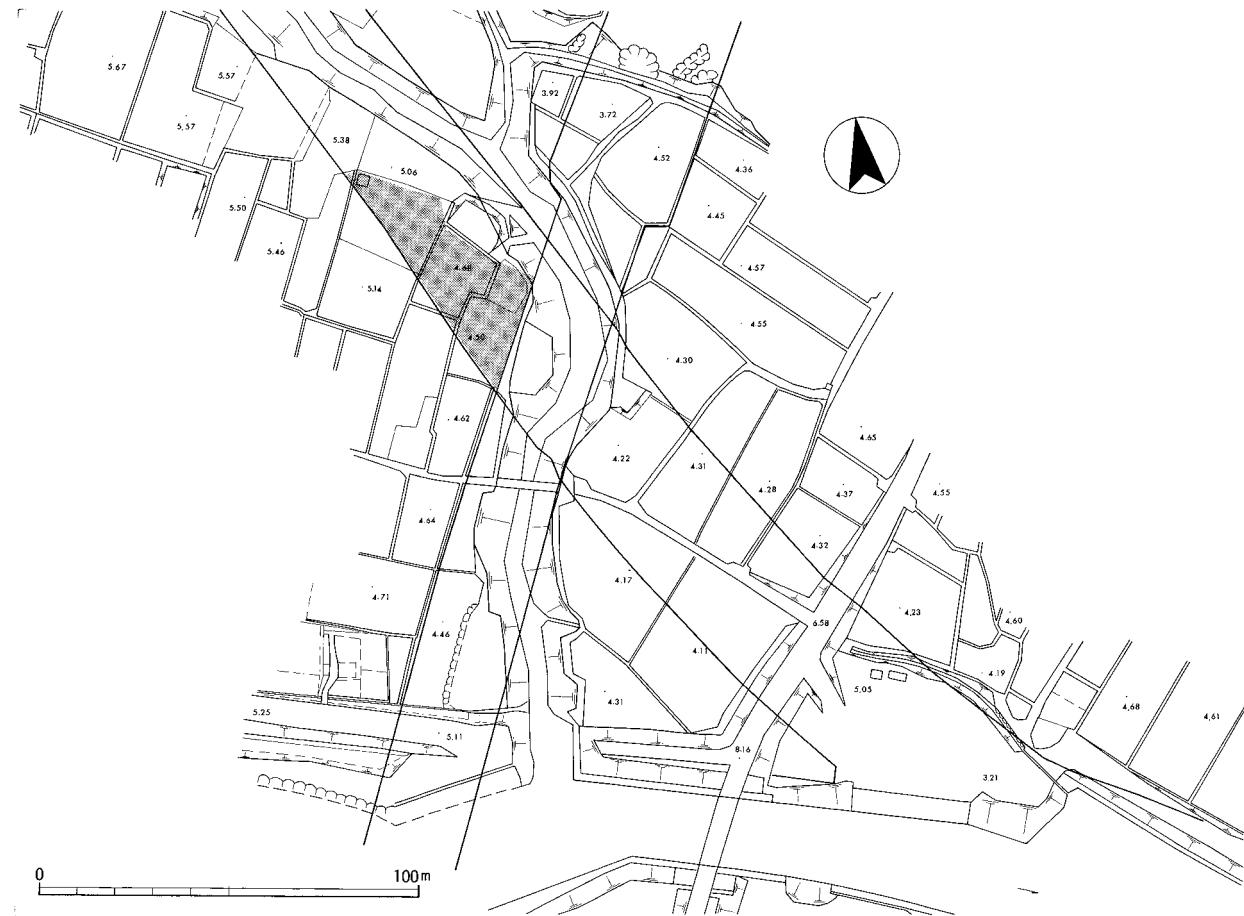
掘りかたは橢円形で、断ち割りの結果、井桁の縦板を検出した。

四隅には隅柱を配して横棟を渡し、その外側に板を立て並べ側板とした構造の井戸で、井筒は曲物で、2段になっており、良好に残存していた。

隅柱は一辺5～7cm前後の柱材で、隅柱の上端は尖らせている。横棟は最下段のみ残存し、組み方は「目違い柄組み」で両端を凸柄に加工したものと凹柄が貫通しないものを組み合わせる<sup>①</sup>。底付近には桶が残存していた。

埋土中からは山茶椀、山皿が出土している。山茶椀は、藤澤良祐氏による編年<sup>②</sup>の第Ⅲ段階第6型式を主体とするため、井戸の廃絶時期は13世紀前葉頃とみられる。

井戸SE182(第8図) 調査区東側のC15グリットで検出した遺構である。掘りかたは楕円形で、埋土

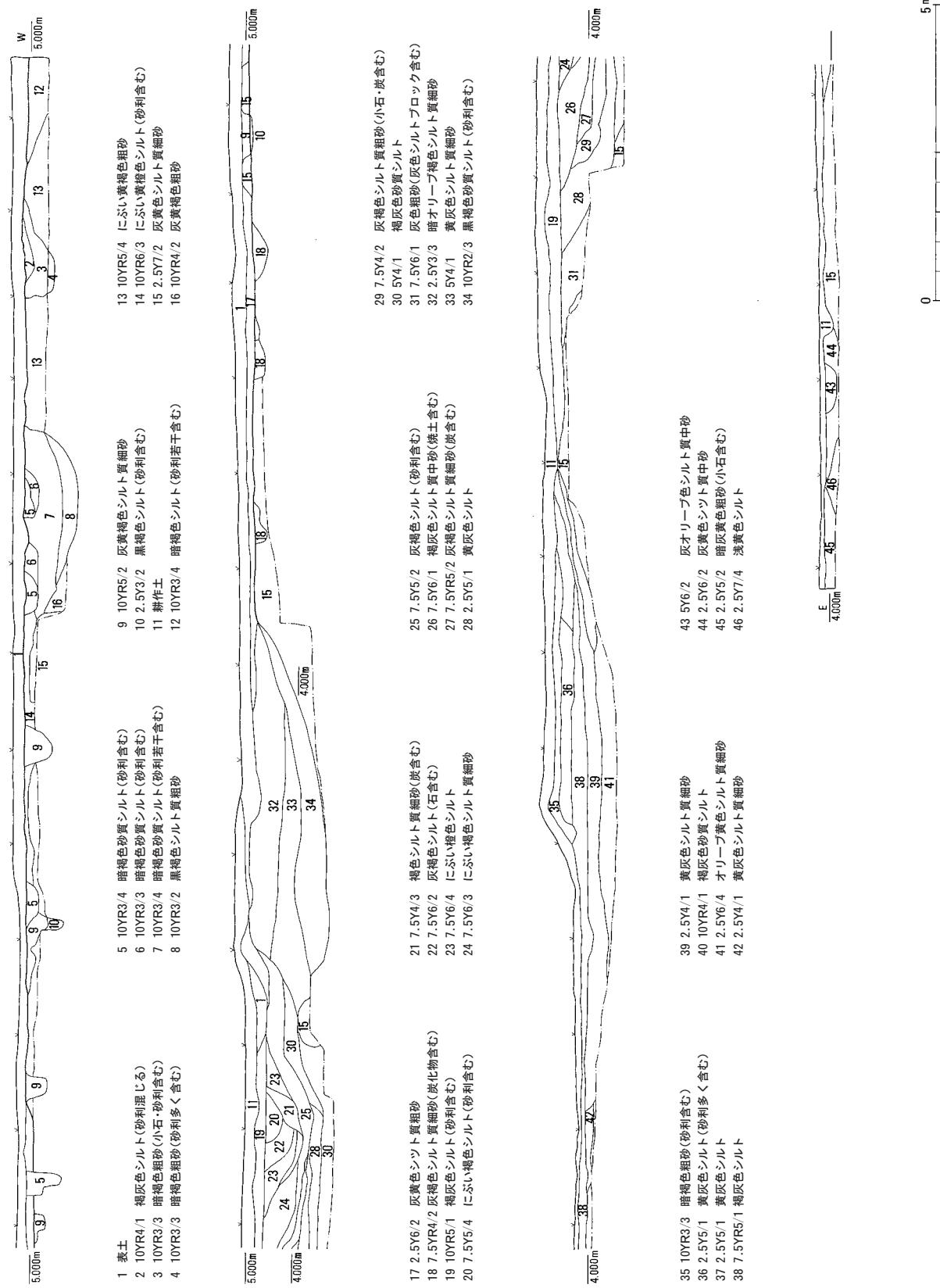


第3図 事業地内調査区位置図 (1:2,000)

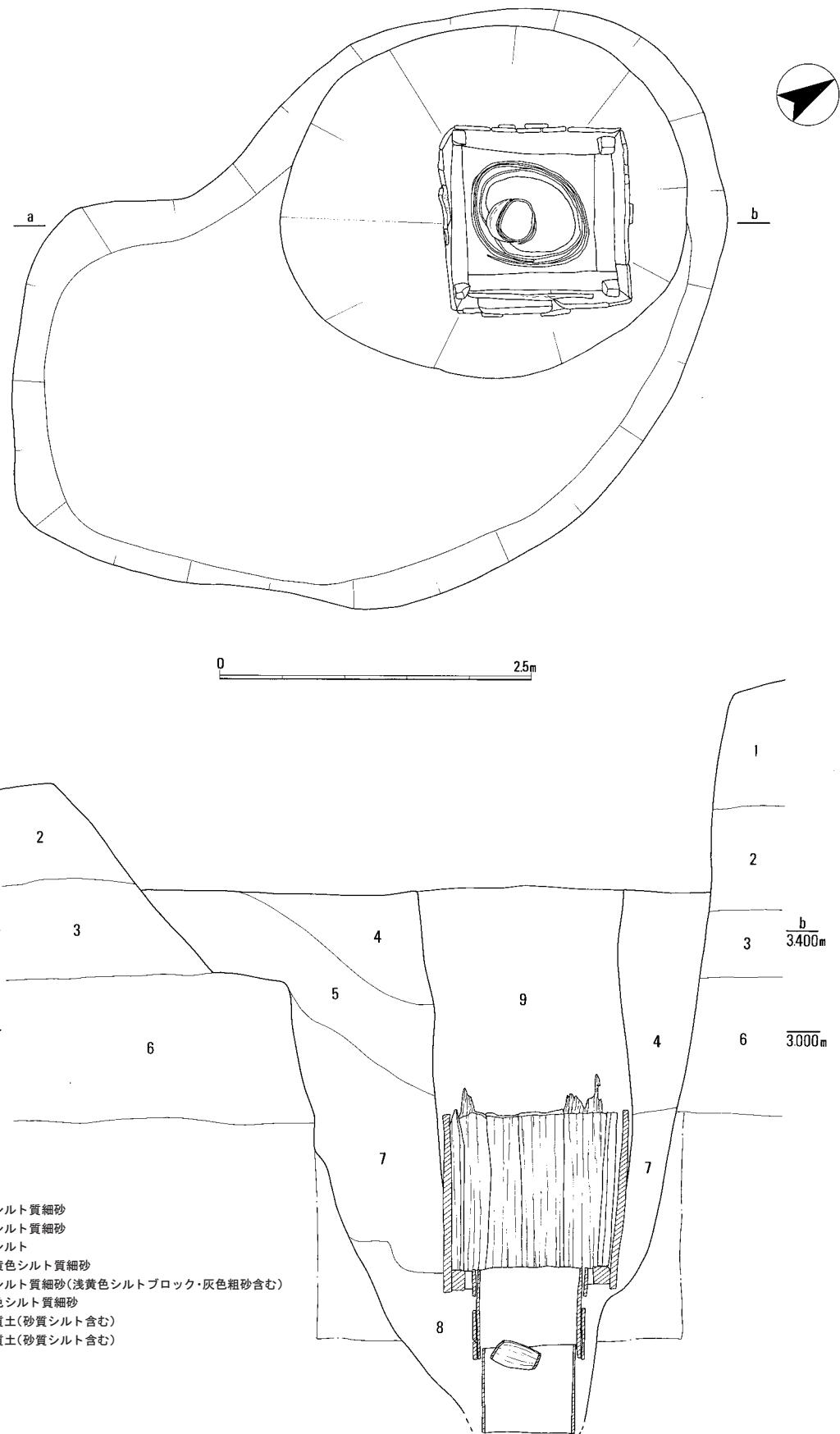


第4図 調査区遺構平面図 (1:200)





第5図 調査区東壁土層断面図 (1:100)

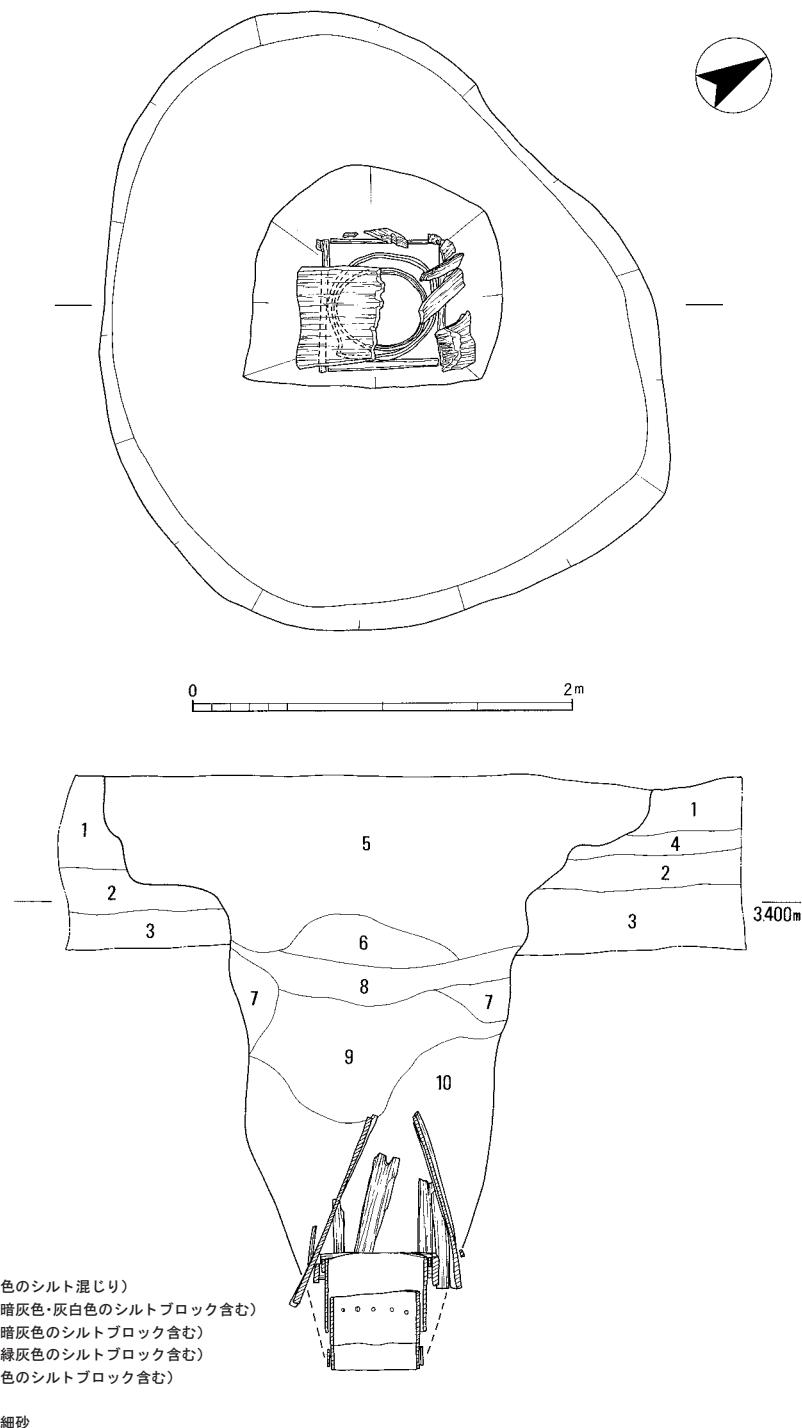


第6図 井戸S E 184平面・断面図 (1:50)

の観察から人為的に埋められて廃絶されている。断ち割りの結果、井桁の縦板を検出した。縦板は一枚板が使用されているが、内側にせり出していて、使用時ないしは廃絶時に崩れたものと考えられる。横桟は最下段のみ残存し、組み方は「目違い柄組み」

で板材は丸太を加工したものである。

井筒は、曲物で2段であるが上段部は一回り小さい曲物が巡っており、2重になっている。また、小孔が穿孔されおり、この小孔から取水したものと考えられる。埋土にはシルトブロックが多く含まれる。



第7図 井戸S E 182平面・断面図 (1:40)

的に埋められたことが判明した。埋土中から山茶椀が完形で出土しており、井戸の廃絶時期は13世紀後葉とみられる。

**溝 S D 170** (第4図) 調査区中央部B 9グリットを中心として検出した遺構である。起伏の激しい溝で、三泗川に流れる溝である。埋土中には土器片が含まれるもの、中世と近世との混入がみられる。

**落ち込み S Z 173** B・C 2～6にかけて確認された遺構である。遺構は起伏が激しく、溝状の落ち込みが東西方向に2条みられた。山茶椀・土師器鍋・土師器皿が出土したが天目茶碗などが混入する。

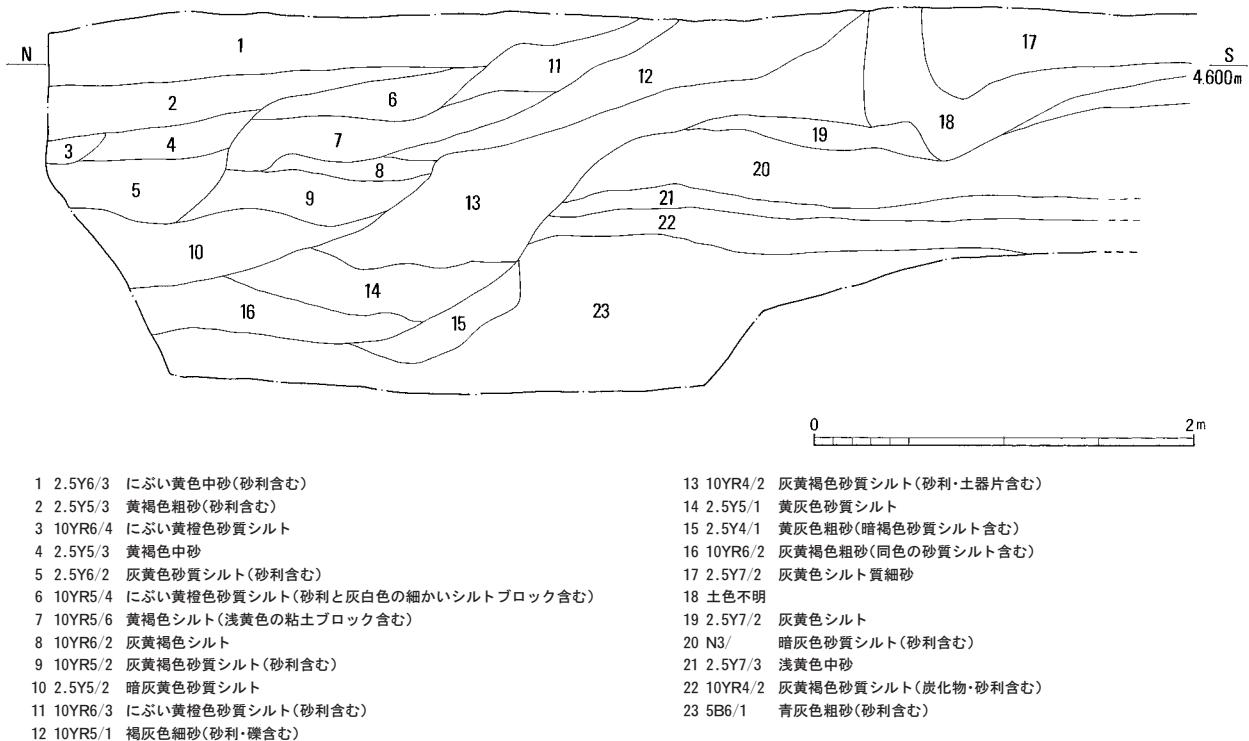
**河道 S R 176** (第8図) 三泗川の落ち込みである。黄色土で厚く盛土がなされている。底からは天目茶碗をはじめ、香炉・丸皿など近世の遺物が出土しており、大窯5段階<sup>③</sup>、17世紀頃以降に農地にするため、整地されたとみられる。

**落ち込み S Z 178** B11～12グリットで検出した。澁みのような箇所であったと思われ、ここから三泗川に向かって細い溝が流れていく。埋土中には中世から近世のものが含まれる。なお、第2次調査B地区

のS D 57に接続している。

**落ち込み S Z 179** S Z 178から連続する溝状の遺構である。中世の常滑三筋壺が出土しているが近世の遺物も含まれている。

**流路 S D 181** 調査区東側のB・C・D11～13グリットにかけて検出した幅約6.5m、深さ約1.4mの溝である。埋土には粗砂の堆積が認められ、當時、ある程度の流水があったと考えられる。また、底部分には腐葉土の堆積も若干みられた。出土遺物は少ない。この溝は、第2次調査区のB地区のS D 57と同一の遺構と考えられる。



第8図 SR 176土層断面図 (1:40)

## IV 遺 物

**S Z 173 (1~29)** 土師器皿、土師器鍋 (7~14)、陶器椀 (15~18)、陶器甕 (22)、染付 (25) などがある。中世後期から近世までの遺物のほか、古代の遺物も若干混入する。

1~6は土師皿である。口径7.5~7.7cmのものと、8.8~9.8cm前後のものがある。7~14は土師器鍋・羽釜である。すべて南伊勢系のもので、8は羽釜である。鍋は伊藤裕偉氏による編年<sup>④</sup>の第3段階b~第4段階c段階に相当する。15~16は焙烙、17~20は陶器の山茶椀である。17~19は尾張産、20は渥美産と考えられる。21は陶器の平椀である。藤澤良祐氏による編年の古瀬戸後III期に相当する。23は志野皿で、24は唐津焼の小壺であろうか。平底の底部には糸切り痕が確認できる。25は陶器の椀で肥前焼の可能性がある。26は須恵器の擂鉢、27は青磁の椀の底部である。28・29は陶器の大甕の破片である。

**S Z 174 (30)** 陶器の椀が出土している。高台には翫殻痕が確認できる。尾張型第6型式のものであろう。

**S Z 171 (31・32)** 陶器の椀と鉢が出土している。31・32は山茶椀である。ともに常滑型で、中野晴久氏による編年の第6型式頃のものであろう。

**S E 184 (33~80)** 埋土から土器と木製品が出土している。

**土器** 土師器皿、陶器小皿、椀などがある。33~35は土師器の皿である。36は陶器の山皿で、37は山茶椀である。藤澤編年の第6型式に相当する。38は練鉢である。

**木製品** 木製品はすべて井戸の部材と曲物である。井戸側柱、隅柱、横桟、曲物、木桶、折敷がある。

39~42は、隅柱である。43~65は、井戸側の板材である。4方向別にそれぞれの部材を並べてあった順で図示している。厚手の縦板に使用された板材は厚さ5~6cmと分厚いものが多く、下半部には明瞭に加工痕が認められる。縦板との間の外側には薄い添板が添えられる。66~69は横桟の板材である。

板材には加工痕が確認でき、両端を凸柄に加工したもの (66・67) と凹柄が貫通しないもの (68・69)

がある。材質は、樹種鑑定をおこなったところ、ヒノキを用いていることが判明した。

70・71は曲物である。完形品で、残存度は極めて良好である。70は、直径54cm、高さ37.3cm、71は直径46cm、高さ34.9cmである。ともに籠は3段で、内面には縦方向にケビキが入れられている。70の底部には目釘穴がある。材質はとともにヒノキである。

**井戸枠内出土木製品 (72・73)** 72・73は、木桶の曲物とその底板である。曲物は、出土時は形を保っていたが、取り上げ時に崩壊してしまい、残存部分を参考に図化したものである。従って当資料については現存しないことを付記しておく。73には目釘穴が12箇所認められている。

74は折敷である。75~80は底板である。

**S E 182 (81~92)** 土器の陶器のほか、木製品の井戸側、横桟、曲物が出土している。

82~86は横桟である。板材は丸太材を裁断し、両端を凸柄に加工したもの (82・85) と凹柄のもの (83・84) がある。樹種はマツである。

87・88はいずれも曲物である。完形品で、残存度は極めて良好である。87が外側に、88がその内側に設置されていたものである。87は、直径51~63cm、高さ37.5cmである。籠は2段で内面には縦方向のケビキが入れられている。88は直径43~48cm、高さ36cmである。88の上部内外面には釘穴がある。ともに樹種はヒノキ科アスナロ属である。81は底板である。

土器は陶器の山茶椀 (89~92) が出土している。91・92は第6型式、89・90が第7型式の範疇におさまるものである。

**S Z 178 (93~98)** 中世~近世の遺物が混入している。93は中北勢系の土師器鍋、94は古瀬戸の卸皿で内面に卸目がある。95は施釉陶器の反皿、大窯第4段階前半頃のものとみられる。96は陶器の鉄絵皿で、登窯第2小期、97は天目茶椀である。登窯第2小期頃に相当する。98は陶器の壺で信楽産と考えられる。

**S D 170 (99~119)** 中世の遺物が主体であるが、近世の遺物も混じる。土師器皿・羽釜、鍋、陶器皿・椀・甕・天目茶椀などが出土している。

99～101は土師器皿、103は中北勢系の羽釜、104は南伊勢系の鍋である。

102は陶器の山皿、106～110・113～118は山茶椀、111～112は天目茶椀。111は登窯第4小期、112が登窯第2小期である。第119は片口鉢で、渥美産である。

**S Z 176 (120～148)** 土師器皿・鍋・陶器などが出土している。120・121は土師器皿である。122・123は土師器鍋で、南伊勢系のものである。124～131は陶器の椀である。124は渥美産の第4型式に、125・127は渥美産の第6型式、126は尾張産の第6型式である。132は折縁皿、134は反皿で登窯第4小期に相当する。135は丸皿で、登窯第3小期に、136は志野皿で、登窯第3小期ある。137は平椀で、古瀬戸後Ⅲ期に相当する。138は折縁鉢で、登窯第2～3小期に、139は香炉で、大窯の第3段階のものか。140は輪禿皿で、登窯第2小期、141は火舎、142は常滑産の鉢、143は知多産の練鉢で第6型式、144は常滑産の片口鉢、145は常滑産の大甕で第10型式、146は軒丸瓦である。147は天目茶椀で、登窯第2小期に相当する。148は陶器の三筋壺であろう。

**包含層 (149～185)** 弥生土器、土師器羽釜、鍋、練鉢、瓦質土器、陶器などが出土しているが、中近世の遺物が大半である。

149～152は弥生土器で、いずれも壺の破片である。149は壺の口縁部で、肩部には櫛描直線文が施されている。150・151は壺の底部である。152には突帶状の粘土紐が貼り付けられている。

153・154は中北勢系の羽釜、155～158は南伊勢系の土師器鍋、159・160は焙烙である。161～167は山茶椀で、164が尾張産のほかは渥美産で第6型式である。169は瓦質土器の奈良火鉢、170・171は練鉢である。173は輪禿皿で、登窯第2小期に相当する。174は志野焼の登窯第3小期、175は志野皿で、登窯第2小期のものである。176～178常滑甕である。176は陶器の壺で信楽産か。181は五輪塔の空輪である。182・183は天目茶椀で、182は登窯第2小期、183は登窯第4小期にそれぞれ相当しよう。184は鉄絵鉢で登窯第2～3小期、185はかま香炉で古瀬戸Ⅱ～Ⅲ期に相当する。

### [註]

①井戸の部分名称については岩本正二「井戸」(『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996年)を参照した。

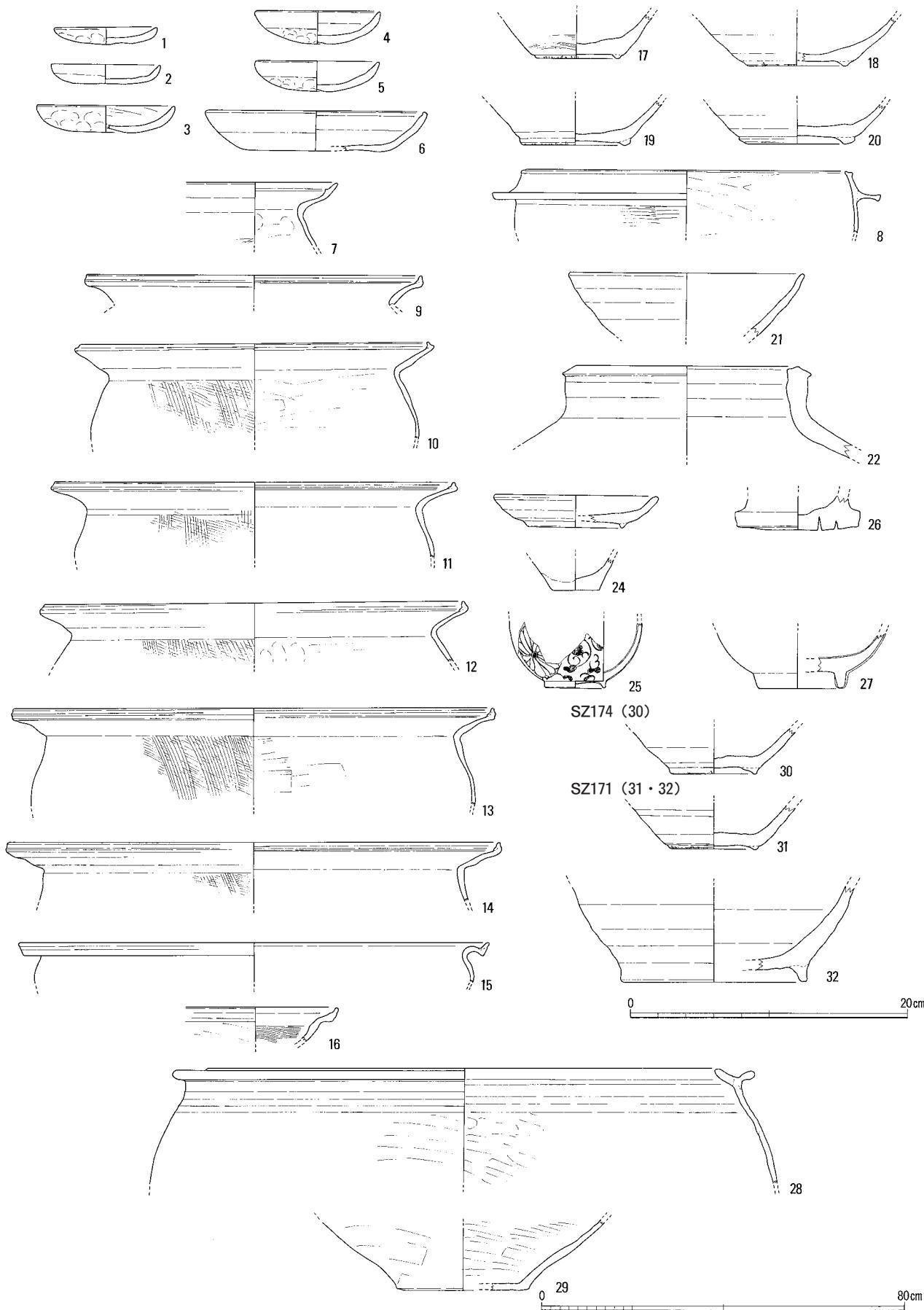
②里前遺跡出土の古瀬戸製品については、愛知学院大学の藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、古瀬戸製品については藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の展開と編年」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の伝播 発表要旨集』2005年)

③里前遺跡の登窯製品については、愛知学院大学の藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、登窯製品については藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年) 藤澤良祐(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館 1988年) 藤澤良祐(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館 1989年)

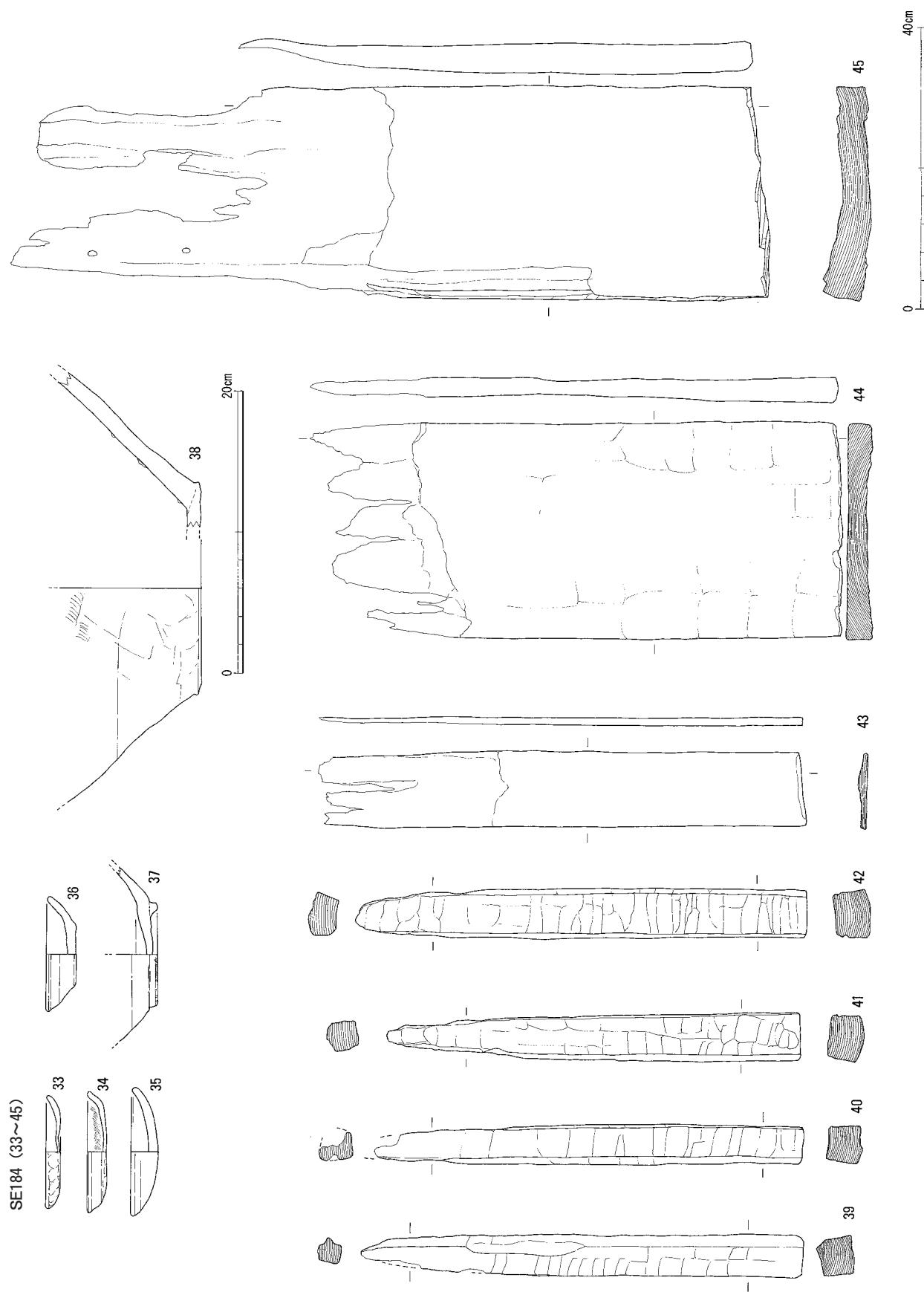
④伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』Vol. 1 三重県歴史文化研究会 1990年)

伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」(平成16年度第1回土器・陶磁器編年研究会『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』2004年)

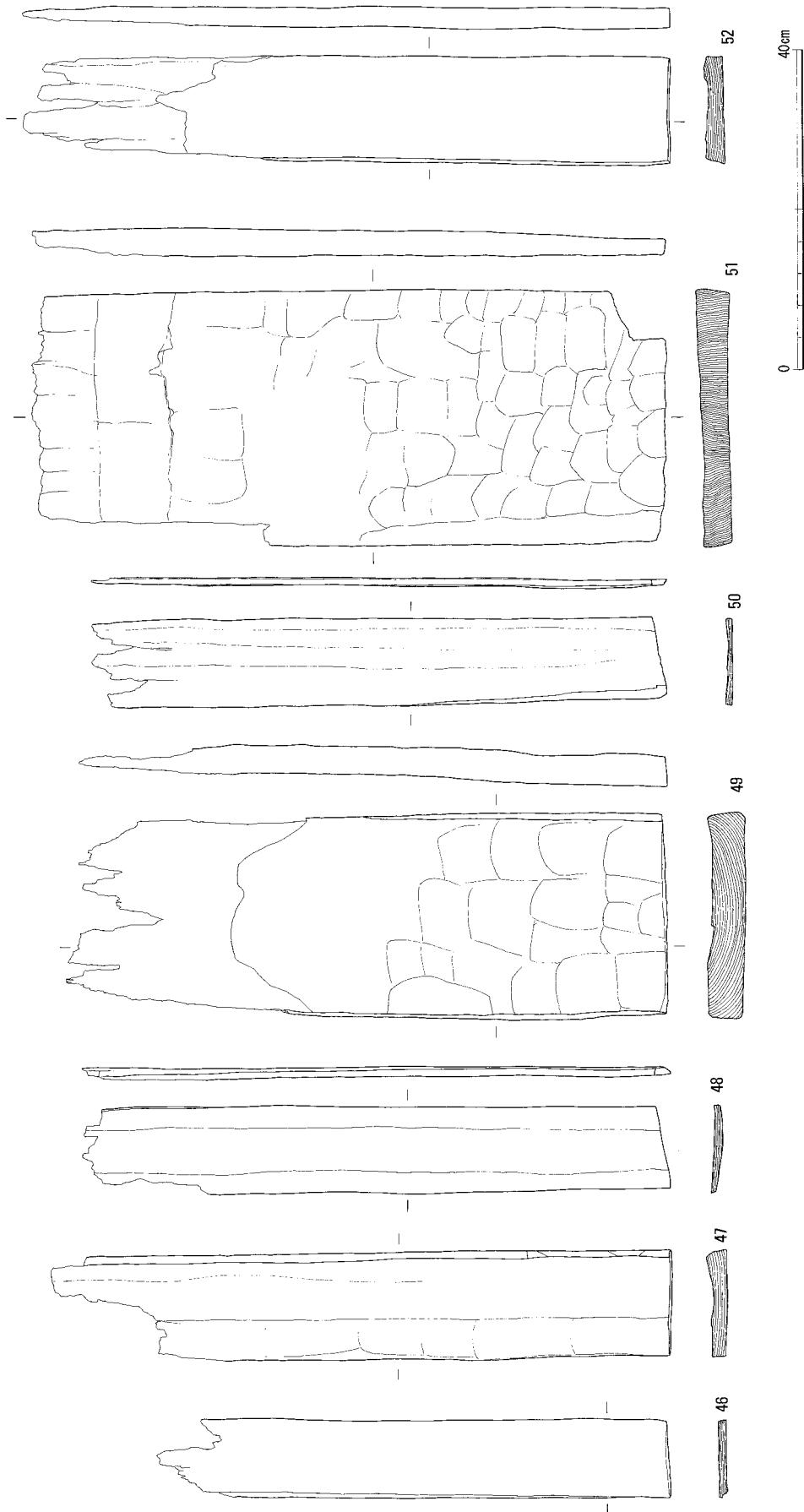
SZ173 (1~29)



第9図 出土遺物実測図 (1) (1~32は1:4、28・29は1:6)

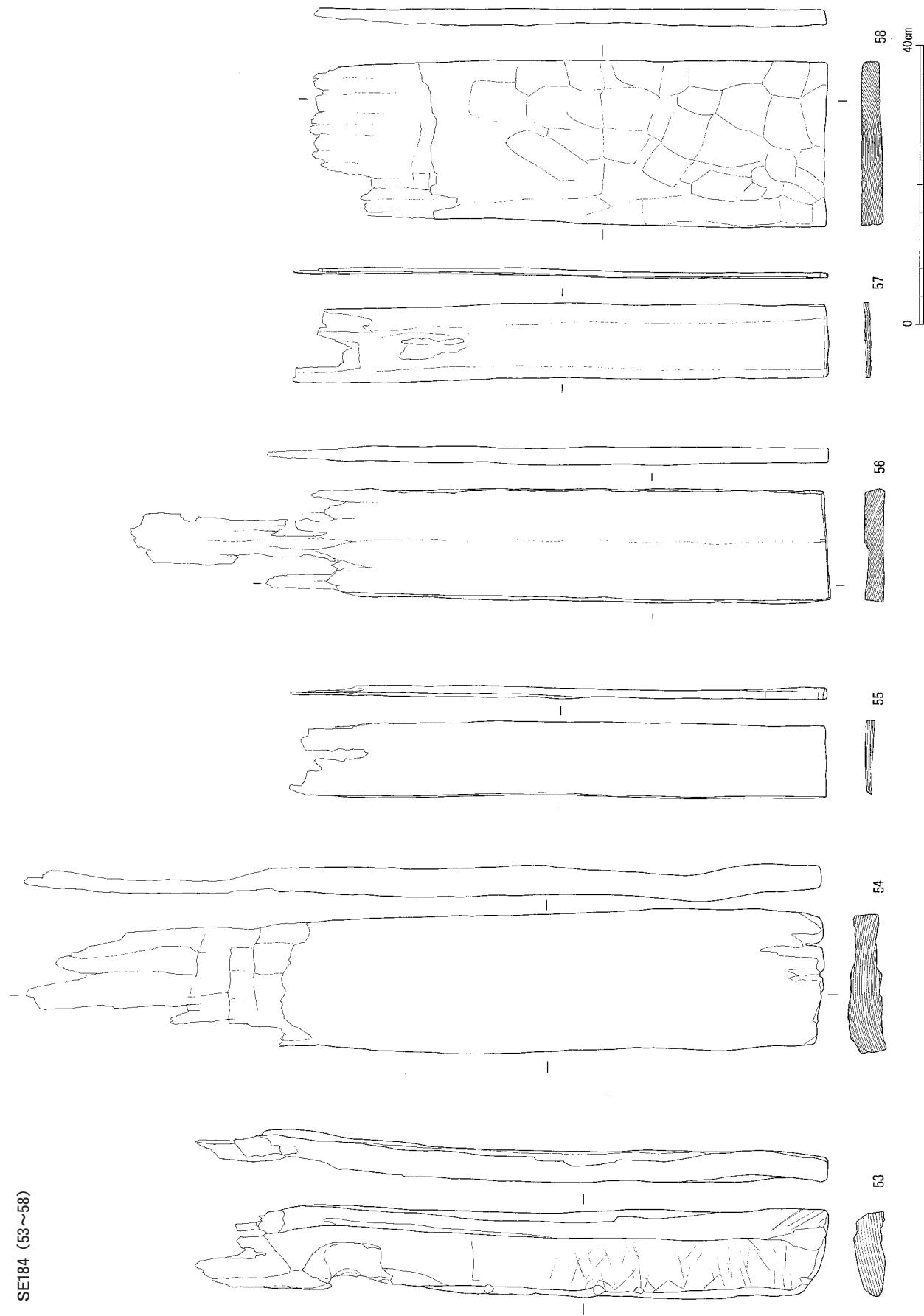


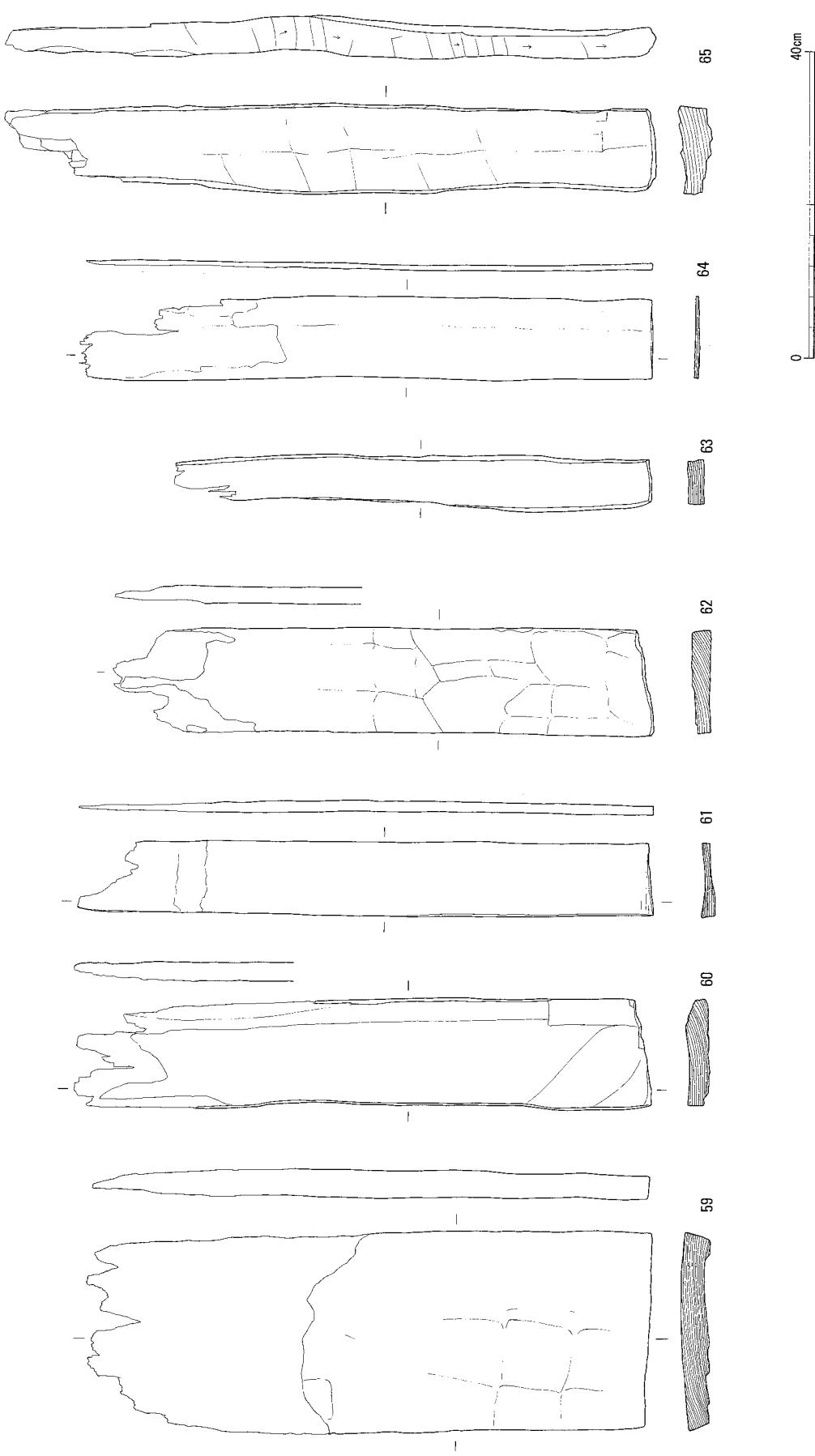
第10図 出土遺物実測図(2) (33~38は1:4、他は1:8)



第11図 出土遺物実測図 (3) (1 : 8)

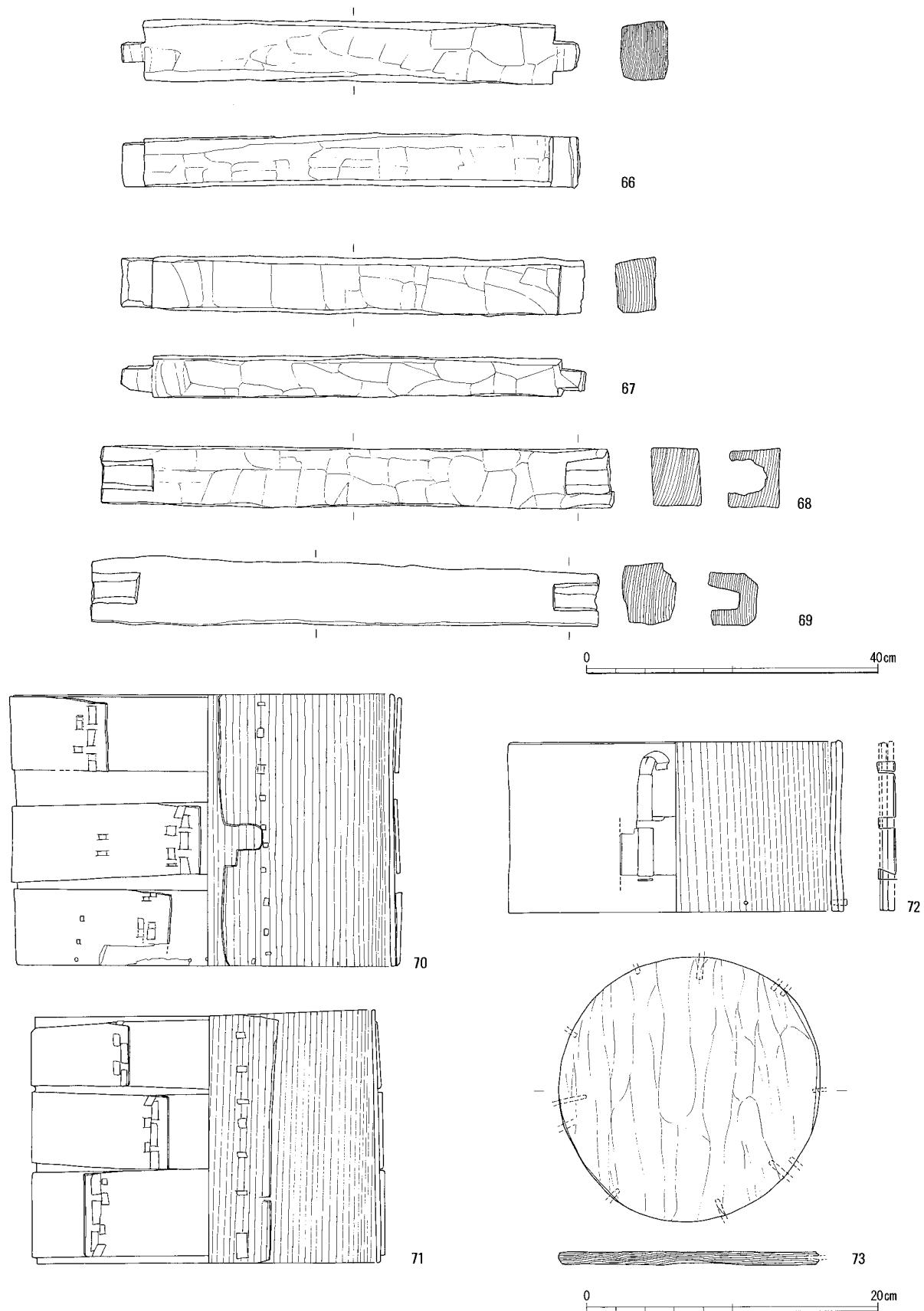
第12図 出土遺物実測図 (4) (1 : 8)





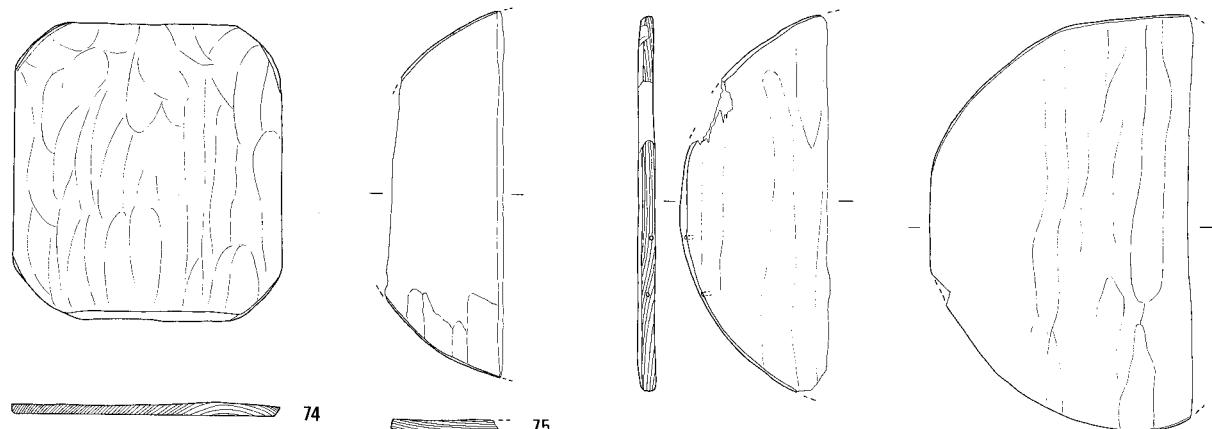
第13図 出土遺物実測図 (5) (1 : 8)

SE184 (66~73)

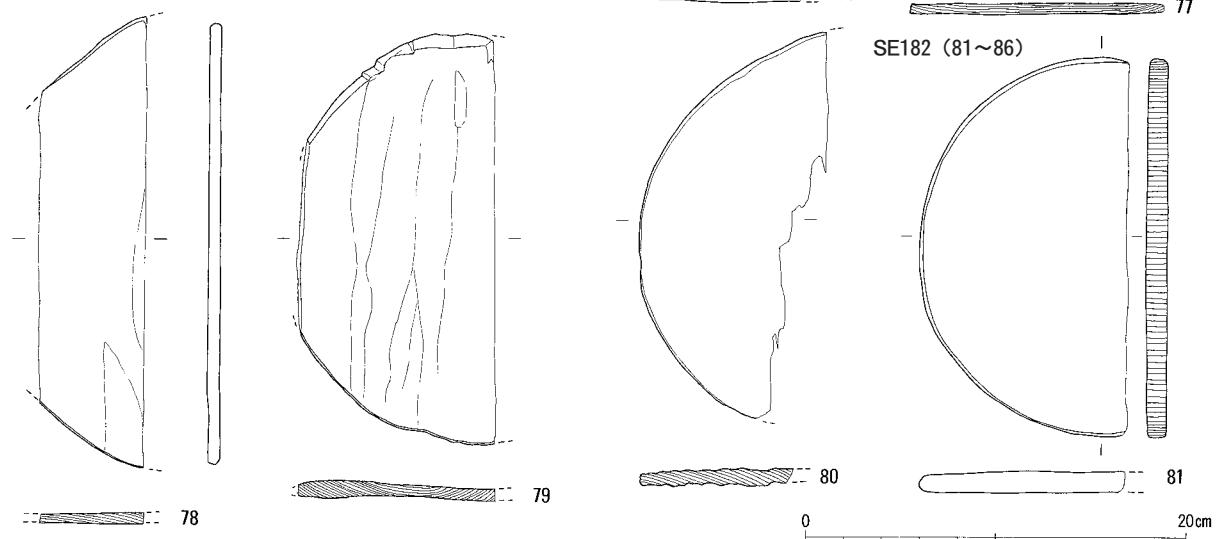


第14図 出土遺物実測図 (6) (1 : 8)

SE184 (74~80)

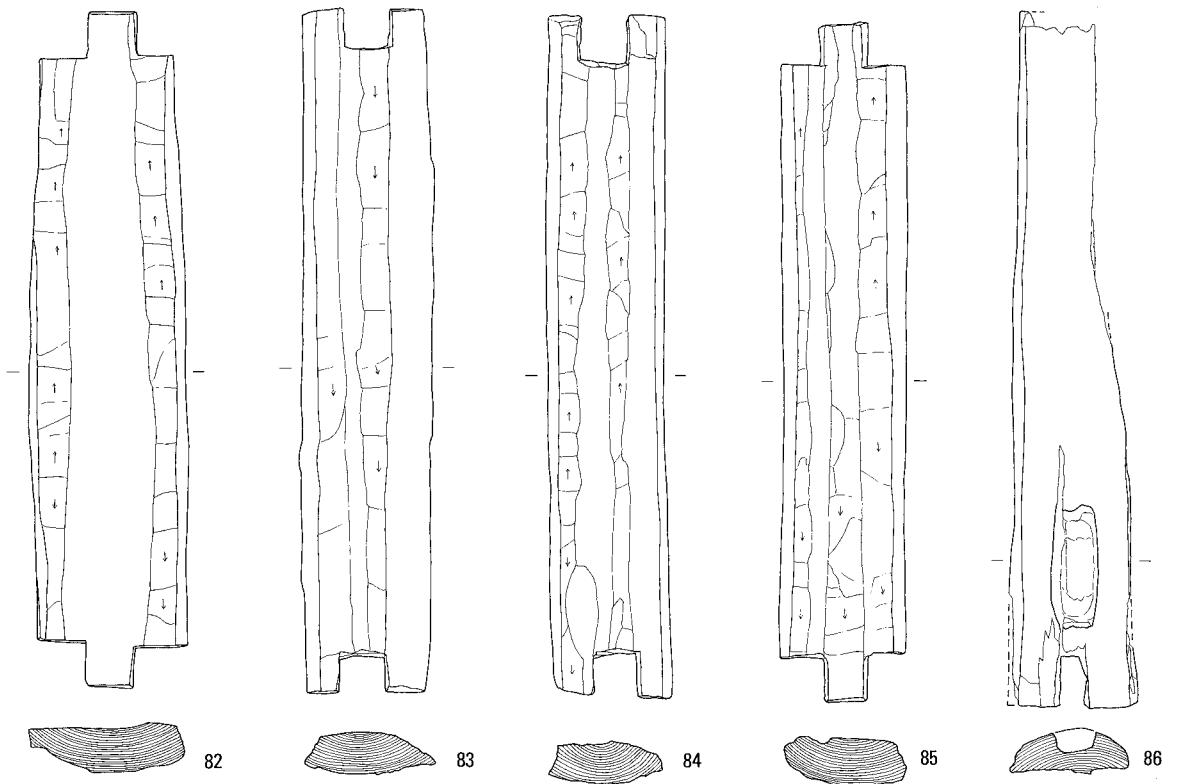


SE182 (81~86)



0

20cm

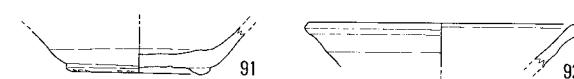
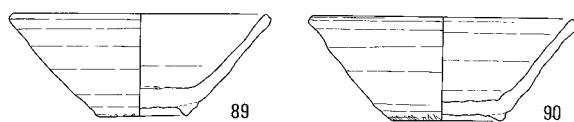
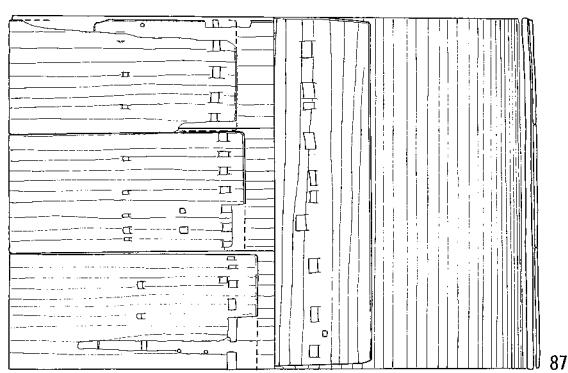


0

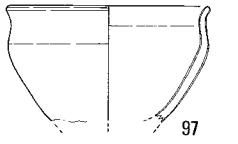
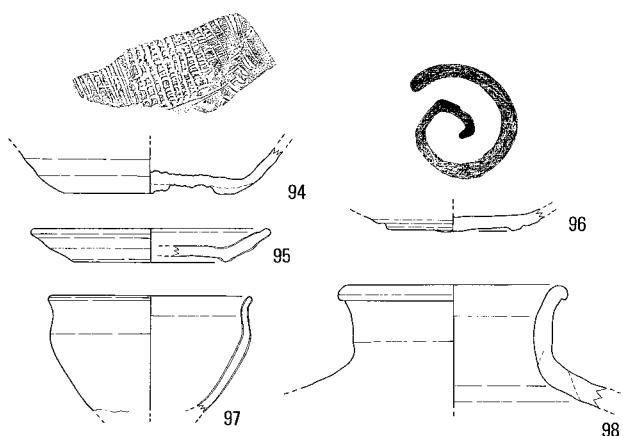
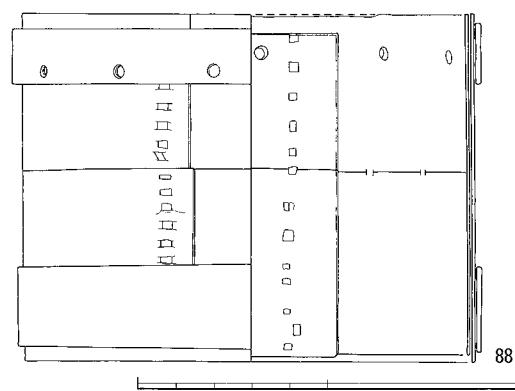
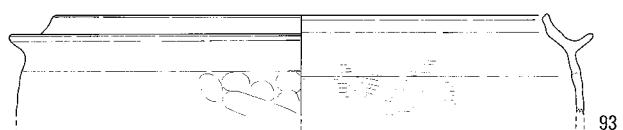
40cm

第15図 出土遺物実測図 (7) (1 : 8)

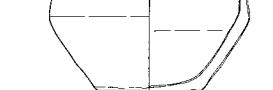
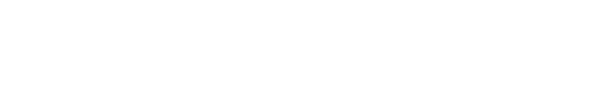
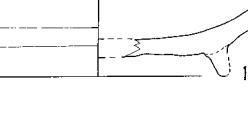
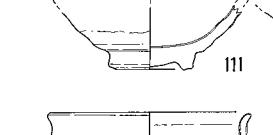
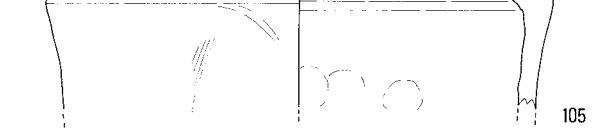
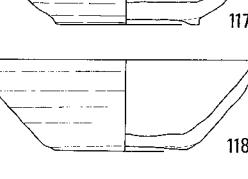
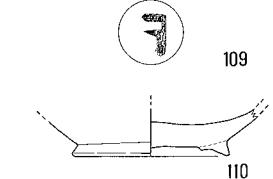
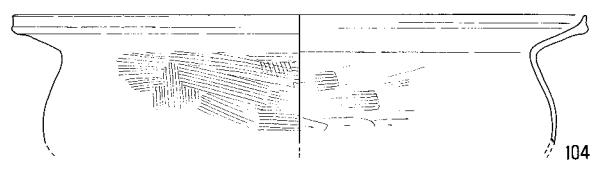
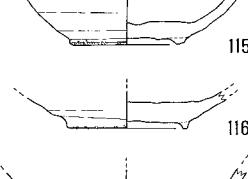
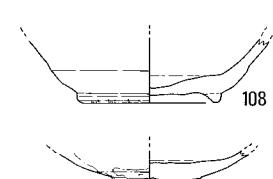
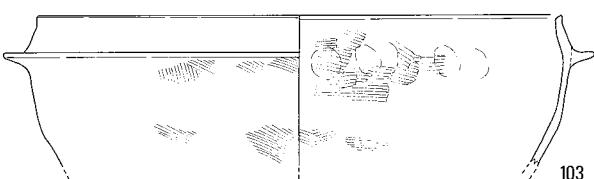
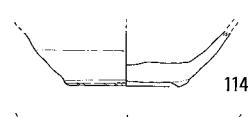
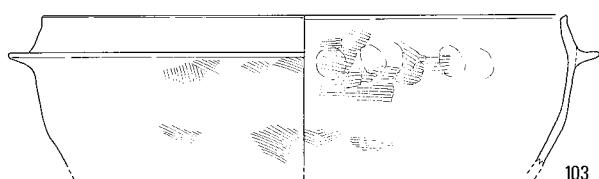
SE182 (87~92)



SZ178 (93~98)



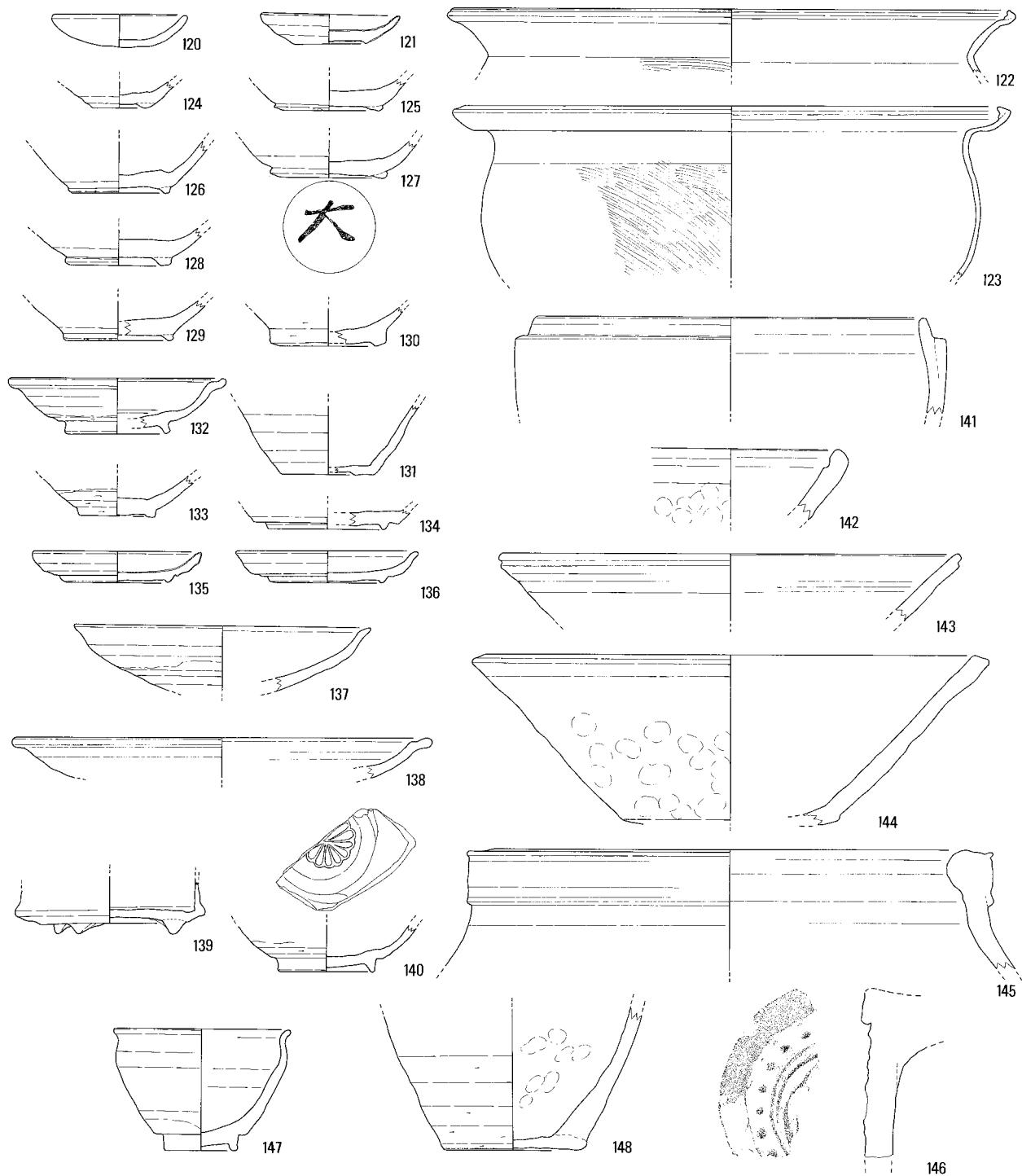
SD170 (99~119)



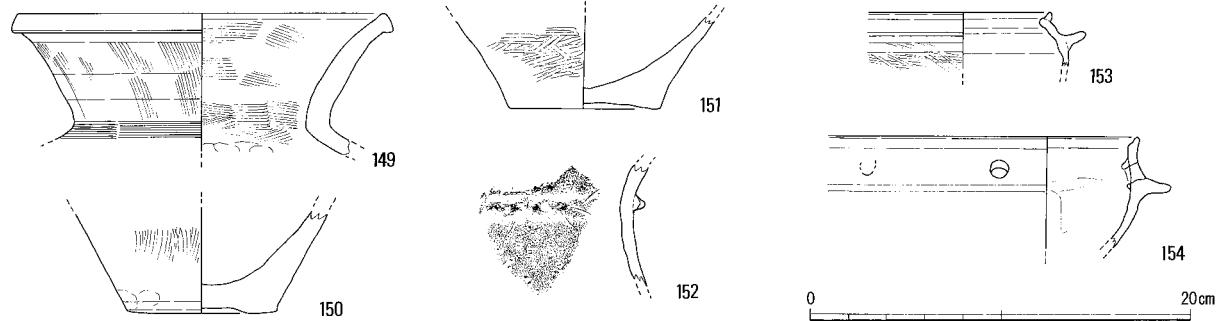
20cm

第16図 出土遺物実測図 (8) (1 : 4)

SZ176 (120~148)

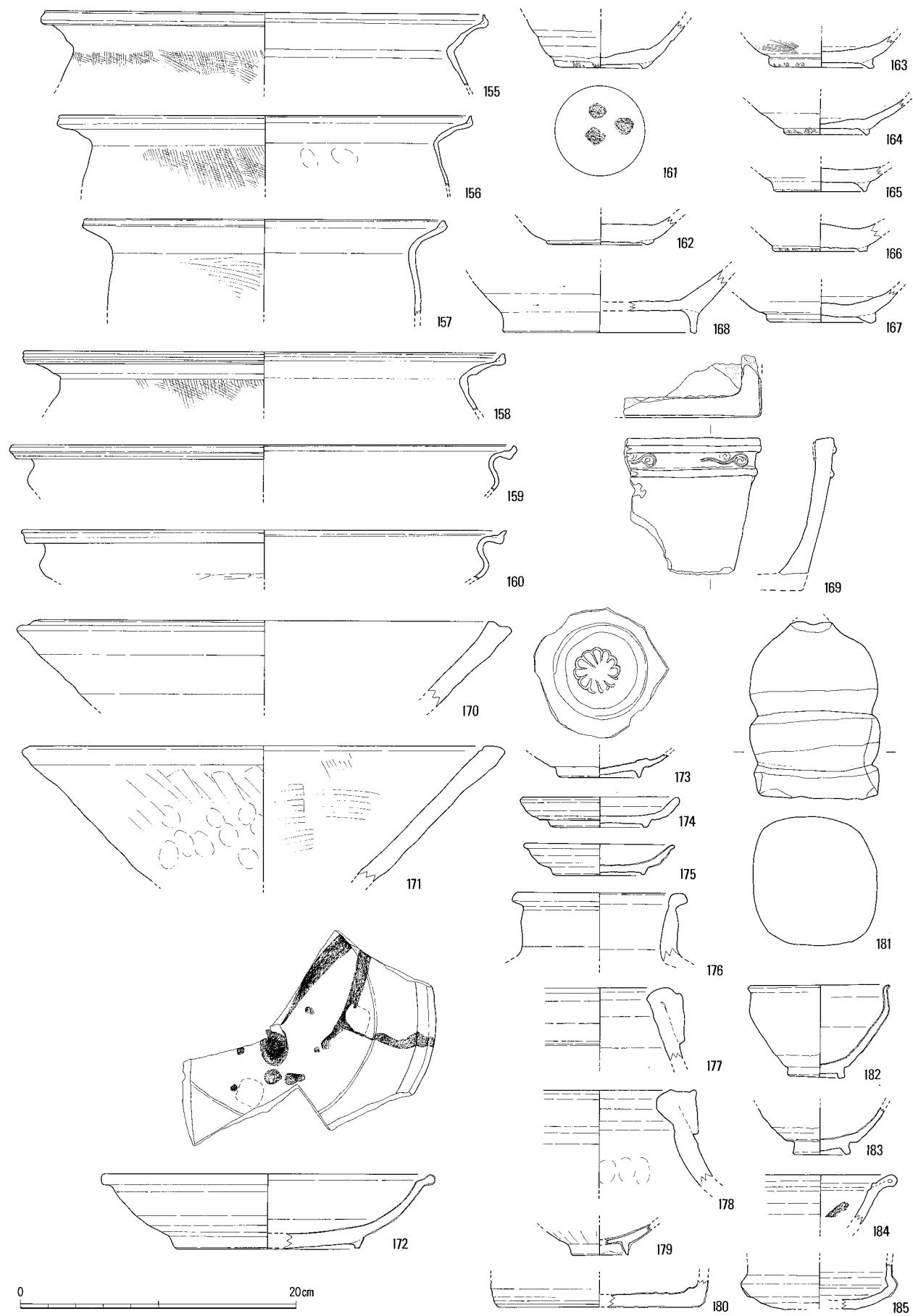


包含層 (149~154)



第17図 出土遺物実測図 (9) (1 : 4)

包含層 (155~185)



第18図 出土遺物実測図 (10) (1 : 4)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	05-3	土師器	皿	D 7	S Z 173	(口)7.3 ~7.5	外: ヨコナデ→ナデ・オサエ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	褐灰 灰白	一部欠	
2	04-5	土師器	皿	D 6	S Z 173	(口)7.7	外: ヨコナデ→ナデ 内: ヨコナデ→ナデ	やや粗	橙	9/12	
3	10-3	土師器	皿	B 4	S Z 173	(口)9.8	外: ナデ・オサエ 内: 工具痕	密	浅黄橙 灰白	6/12	
4	10-5	土師器	皿	B 5	S Z 173	(口)9.0	外: ヨコナデ→オサエ 内: ヨコナデ→ナデ	やや粗	浅黄橙	3/12	口縁部に油煙
5	10-4	土師器	皿	B 5	S Z 173	(口)8.8	外: ヨコナデ→オサエ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	にぶい橙	8/12	
6	10-2	土師器	皿	B 4	S Z 173	(口)15.5	外: ヨコナデ→ナデ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	にぶい黄橙 灰黄褐	3/12	
7	08-4	土師器	鍋	A・B 3	S Z 173	径不明	外: ヨコナデ→ナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→ナデ	やや粗	にぶい黄橙	小片	スス付着
8	10-1	土師器	羽釜	B 4	S Z 173	(口)23.0	外: ヨコナデ→ハリツケナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→工具ナデ	やや密	浅黄橙 にぶい黄橙	小片	スス付着
9	06-3	土師器	鍋	D 7	S Z 173	(口)24.1	外: ヨコナデ→ナデ 内: ヨコナデ	やや密	にぶい橙 暗灰	2/12	
10	08-2	土師器	鍋	B 4	S Z 173	(口)25.2	外: ヨコナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→工具ナデ	やや密	にぶい黄橙	1/12	スス付着
11	06-4	土師器	鍋	D 7	S Z 173	(口)28.8	外: ヨコナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	浅黄橙 暗灰	2/12	
12	05-2	土師器	鍋	D 7	S Z 173	(口)30.1	外: ヨコナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密	浅黄橙	1/12	
13	06-1	土師器	鍋	D 7	S Z 173	(口)34.6	外: ヨコナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→工具ナデ	やや密	にぶい黄橙 浅黄橙	2/12	外面にスス付着
14	07-1	土師器	鍋	D 7	S Z 173	(口)35.4	外: ヨコナデ→ハケメ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	にぶい黄橙 暗灰	1/12	スス付着
15	06-2	土師器	焰焰	D 7	S Z 173	(口)33.8	外: ヨコナデ→ナデ 内: ヨコナデ→ナデ	やや密	橙 暗灰	2/12	
16	08-5	土師器	焰焰	C 6	S Z 173	径不明	外: ヨコナデ→ナデ 内: ヨコナデ→ハケメ	やや密	にぶい橙	小片	スス付着
17	09-2	陶器	山茶椀	C 5	S Z 173	(台)5.9	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	やや密	灰白 灰黄	4/12	尾張第6型式 もみがら痕
18	07-3	陶器	山茶椀	D 7	S Z 173	(台)7.2	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	4/12	モミガラ痕 内面に自然釉 尾張第6型式
19	09-1	陶器	山茶椀	C 5	S Z 173	(台)8.0	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	やや粗	灰白	3/12	モミガラ痕 尾張第6型式
20	07-4	陶器	山茶椀	D 7	S Z 173	(台)6.7	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	4/12	渥美第6型式
21	09-5	陶器	平椀	B 4	S Z 173	(口)16.9	外: ロクロ成形 内: ロクロ成形	やや密	淡黄 浅黄	2/12	施釉 古瀬戸後三期
22	09-4	陶器	壺	B 4	S Z 173	(口)16.0	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	やや粗	灰白 灰赤	2/12	内面に鉄釉、外面に自然釉 常滑産
23	07-5	陶器	皿	D 7	S Z 173	(口)11.6	外: ロクロナデ→貼付高台→糸切痕 内: ロクロナデ	密	灰白 灰白	2/12	施釉 志野皿
24	07-6	陶器	壺	D 7	S Z 173	(底)3.4	外: ロクロナデ→糸切痕 内: ロクロナデ	密	にぶい橙 明オーリーブ	完存	内面に施釉 唐津焼
25	10-6	陶器	椀	D 6	S Z 173	(台)4.2	外: 施釉(絵付け) 内: 施釉	密	明緑灰	6/12	肥前焼?
26	07-2	須恵器	播鉢	D 7	S Z 173	(底)8.8	外: ロクロナデ→ロクロケズリ 内: ロクロナデ	密	灰N	2/12	
27	09-6	陶器	青磁	B 5	S Z 173	(台)6.0	外: 削出高台 内: ロクロ成形	密	オリーブ黒 にぶい黄橙	3/12	施釉
28	026-1	陶器	大甕	C 6	S Z 173	(口)112.0	外: ナデ→ヨコナデ 内: ケズリ	やや粗	褐	1/2	
29	026-2	陶器	大甕	D 7	S Z 173	(底)29.0	外: ナデ→指オサエ・ナデ 内: ナデ	やや粗	褐	1/3	
30	09-3	陶器	山茶椀	B 4	S Z 174	(台)6.2	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	やや粗	灰白	6/12	尾張第6型式
31	17-1	陶器	山茶椀	C 7	S Z 171	(底)6.0	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	やや粗	灰白	6/12	もみがら痕 内面に自然釉とスス付着 常滑第6型式
32	17-2	陶器	片口鉢	C 7	S Z 171	(底)13.0	外: ロクロナデ→高台貼付後ナデ→ナデ 内: ロクロナデ	やや粗	灰	3/12	自然釉付着 常滑産 尾張第6型式
33	01-8	土師器	皿	B 12	S E 184	(口)7.8	外: ヨコナデ→ナデ・指オサエ 内: ヨコナデ→ナデ	粗	灰白	6/12	
34	01-6	土師器	皿	B 12	S E 184	(口)8.3	外: ヨコナデ→指オサエ・ナデ 内: ヨコナデ→ハケメ	やや粗	灰白	ほぼ完形	
35	01-7	土師器	皿	B 12	S E 184	(口)8.8	外: ナデ→指オサエ・ナデ 内: ナデ	やや粗	灰白	3/12	
36	01-9	陶器	山皿	B 12	S E 184	(口)7.8	外: ロクロナデ→糸切痕 内: ロクロナデ	密	灰白	完形	内面に灰かぶり・スス付着 渥美第5型式
37	01-5	陶器	山茶椀	B 12	S E 184	(底)6.8	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	6/12	渥美第6型式 内面に重ね焼き痕あり
38	02-1	陶器	練鉢	B 12	S E 184	(底)13.6	外: 工具ナデ→ナデ 内: 調整不明	密	灰 灰褐	3/12	
89	01-2	陶器	山茶椀	B C 15	S E 182	(口)13.3	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	完形	尾張第7型式
90	01-1	陶器	山茶椀	B C 15	S E 182	(口)13.6	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	9/12	尾張第7型式
91	01-3	陶器	山茶椀	B C 15	S E 182	(底)6.4	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	底部完形	尾張第6型式
92	01-4	陶器	山茶椀	B C 15	S E 182	(口)13.8	外: ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	2/12	渥美第6型式
93	18-3	土師器	鍋	B 11	S Z 178	(口)25.9	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ→ハケメ	やや粗	灰白	2/12	スス付着
94	18-2	陶器	鉢	B 11	S Z 178	(底)9.0	外: ロクロナデ→未調整→糸切痕 内: ロクロナデ	密	灰黄 にぶい赤褐	3/12	古瀬戸 内面に鉢目
95	17-5	陶器	反皿	B 1 1	S Z 178	(口)12.4	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	密	灰白	3/12	輪トチンの剥がれた痕あり 大窓4前半

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
96	17-3	陶器	鉄絵皿	B10	S Z178	(底)7.0	外:ケズリ→削り出し高台→糸切痕 内:ロクロナデ	密	灰白	完存	三又トチン痕 登窯第2小期
97	17-4	陶器	天目茶碗	B10	S Z178	(口)10.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	3/12	登窯第2小期
98	17-6	陶器	壺	C10	S D179	(口)11.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	にぶい赤褐	6/12	信楽産
99	03-6	土師器	皿	C 9	S D170	(口)12.5	外:ヨコナデ→オサエ→ナデ 内:ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	灰白 浅黄橙	7/12	
100	04-4	土師器	皿	b10	S D170	(口)9.2	外:ヨコナデ→オサエ・ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	灰白	完存	
101	04-6	土師器	皿	C 9	S D170	(口)8.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや粗	浅黄橙	4/12	
102	01-10	陶器	山皿	C 9	S D170	(口)7.6	外:ロクロナデ→糸切痕 内:ロクロナデ	密	灰白	8/12	
103	04-1	土師器	鍋	b10	S D170	(口)27.6	外:ヨコナデ→ハリツケナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ハケ・オサエのちナデ	やや密	浅黄橙 暗褐	2/12	外面にスス付着
104	05-1	土師器	鍋	C 9	S D170	(口)30.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→工具ナデ→ケズリ	やや密	にぶい黄橙	3/12	
105	02-2	土師器	火鉢	D 8	S D170	(口)26.0	外:ヨコナデ→工具ナデ 内:ヨコナデ→ナデ・指オサエ	粗	にぶい黄橙	2/12	残存している一方の断面は焼成前に切断された工具痕とその為の内面への粘土の盛りあがりあり。
106	03-4	陶器	山茶椀	B 9	S D170	(口)15.8	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや粗	灰黄	3/12	尾張第6型式 モミガラ痕あり 外面に自然釉
107	05-5	陶器	山茶椀	D 9	S D170	(台)6.0 ~6.5	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	完存	渥美第6型式
108	02-4	陶器	山茶椀	A 9 · B 9	S D170	(底)7.0	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	底部完存	内面に自然釉付着 尾張第6型式
109	02-3	陶器	茶椀	C 9	S D170	(底)3.8	外:ミガキ→削り出し高台 内:	密	にぶい褐	底部完存	墨書きあり 外面釉付着 唐津焼
110	03-3	陶器	山茶椀	B 10	S D170	(底)8.0	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	3/12	内面に自然釉 尾張第4型式?
111	03-7	陶器	天目茶椀	C 9	S D170	(底)4.3	外:施釉→ケズリ出し 内:施釉	密	灰白 内面黒色	底部完存	登窯第4小期
112	03-8	陶器	天目茶椀	B 10	S D170	(口)10.4	外:ロクロナデ・施釉→ケズリ出し 内:ロクロナデ・施釉	密	灰白 黒	3/12	登窯第2小期
113	03-5	陶器	山茶椀	C 9	S D170	(底)6.9	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白 灰黄	底部完存	渥美第6型式
114	15-2	陶器	山茶椀	C 9	S D170	(台)5.9	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	6/12	尾張第6型式 自然釉
115	15-3	陶器	山茶椀	B 9	S D170	(台)6.0	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	4/12	モミガラ痕 内面に墨残 渥美第6型式
116	05-6	陶器	山茶椀	C 9	S D170	(台)6.0 ~6.2	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	9/12	尾張第6型式 内面に自然釉
117	05-4	陶器	山茶椀	D 9	S D170	(台)7.0 ~7.2	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	完存	渥美6型式 内面に墨痕
118	03-2	陶器	山茶椀	C 9	S D170	(口)14.8	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白 黄灰	3/12	渥美6か7型式
119	03-1	陶器	片口鉢	C 9	S D170	(底)13.6	外:ロクロケズリ→ハリツケ高台→糸切痕・ナデ 内:ロクロナデ	密	褐灰 灰白	小片	渥美産
120	15-1	土師器	小皿	D 4	S R176	(口)8.6	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄橙	8/12	
121	04-3	土師器	皿	D 5	S R176	(口)8.7	外:ヨコナデ・施釉→ケズリ出し 内:ヨコナデ・施釉	やや密	灰白	10/12	志野皿 登窯第2小期
122	12-3	土師器	鍋	D 5	S R176	(口)36.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	2/12	スス付着
123	12-1	土師器	鍋	C 3	S R176	(口)34.6	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→オサエ・ナデ	粗	にぶい黄橙	2/12	スス付着
124	14-3	陶器	山茶椀	D 6	S R176	(台)3.7	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白 灰黄	完存	渥美第4型式
125	11-1	陶器	山茶椀	B 2	S R176	(台)6.2	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	9/12	渥美第6型式 モミガラ痕
126	14-2	陶器	山茶椀	D 6	S R176	(台)6.2	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	粗	灰白	完存	モミガラ痕 尾張第6型式
127	11-4	陶器	山茶椀	C 4	S R 7	(台)7.6	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	10/12	底面に墨書 渥美第6型式
128	14-1	陶器	山茶椀	D 6	S R176	(台)6.7	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	6/12	内面に使用痕 渥美5型式
129	13-5	陶器	山茶椀	D 6	S R176	(台)6.9	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	4/12	内面に自然釉 渥美6型式
130	11-3	陶器	白磁	C 4 · D 4	S R176	(台)7.5	外:ロクロケズリ 内:ロクロ使用	密	灰白 灰白	5/12	内面に施釉
131	11-5	陶器	山茶椀	C 4	S R176	(底)6.0	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	浅黄	5/12	尾張型7型式
132	14-7	陶器	折縁皿	E 6	S R176	(口)14.0	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロ使用	密	にぶい赤褐 灰白	3/12	施釉
133	13-3	陶器	椀	D 5	S R176	(台)4.8	外:ロクロケズリ 内:ロクロ使用	密	オリーブ黄 灰白	完存	モミガラ痕 施釉陶器
134	14-5	陶器	反皿	D 6	S R176	(台)7.6	外:ロクロケズリ 内:ロクロ使用	密	灰オリーブ 灰	2/12	施釉 登窯第4小期
135	15-5	陶器	丸皿	D 4	S R176	(口)10.8	外:ロクロケズリ 内:ロクロ使用	密	灰白	6/12	施釉 登窯第3小期
136	15-6	陶器	丸皿	D 4	S R176	(口)11.6	外:ロクロケズリ 内:ロクロ使用	やや密	灰白	6/12	施釉 外面の底にトチン跡 残志野皿 登窯第3小期
137	15-4	陶器	平椀	C 3	S R176	(口)19.0	外:調整不明→ロクロケズリ 内:調整不明	密	オリーブ黄	2/12	古瀬戸後Ⅲ期
138	14-4	陶器	折縁鉢	D 6	S R176	(口)26.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰黄	2/12	施釉 登窯第2・3小期
139	15-8	陶器	筒形香炉	D 6	S R176	(底)12.3	外: 内:ロクロナデ	密	オリーブ灰 灰黄	ほぼ完形	施釉 外面の底にトチン跡 残大釜3?
140	14-6	陶器	輪禪皿	D 6	S R176	(台)6.0	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:	密	灰白 にぶい赤褐	6/12	施釉 登窯第2小期

第2表 出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
141	12-2	瓦質陶器	風炉	C 4	S R176	(口)25.0	外:ヨコナデ→ミガキ 内:ヨコナデ	密	灰 にぶい黄橙	2/12	
142	13-4	陶器	鉢	D 5	S R176	径不明	外:ヨコナデ→オサエ・ナデ 内:ヨコナデ→沈線→ナデ	やや粗	にぶい橙 にぶい橙	小片	常滑産
143	11-2	陶器	練鉢	C 3	S R176	(口)29.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	1/12	内面に自然釉 知多6型式
144	16-1	陶器	片口鉢	C 4	S R176	(口)33.4	外:ヨコナデ→指オサエ・ナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ナデ→使用痕	密	にぶい橙 橙	1/5	常滑産
145	13-1	陶器	甕	C 4	S R176	(口)33.7	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	赤褐 灰赤	2/12	常滑産10型式 外面に施釉
146	16-2	瓦	軒丸瓦	C 4	S R176	(径)10.8 以上	—	やや密	灰	小片	巴文
147	15-7	陶器	天目茶碗	D 5	S R176	(口)11.4	外:削出し高台 内:	密	黒	2/12	登窯第2小期
148	13-2	陶器	三筋壺	D 5	S R176	(底)8.9	外:ヨコナデ→ロクロケズリ→未調整 内:オサエ・ヨコナデ	やや密	灰 褐灰	3/12	
149	08-3	弥生土器	壺	C 5	S Z173	(口)19.0	外:ヨコナデ→ハケメ→クシ描横線 内:ヨコナデ→ハケメ	やや粗	橙 にぶい橙	4/12	
150	25-5	弥生土器	壺	A15	包含層	(底)8.0	外:ハケメ 内:ナデ?	粗	灰白 浅黃橙	6/12	磨耗著しい
151	21-1	弥生土器	壺	A15	壁面	(底)7.8	外:ミガキ→ナデ 内:ナデ	粗	灰白 浅黃橙	4/12	
152	23-3	弥生土器	壺	—	包含層	—	外:ナデ→粘土紐貼り付け→ナデ 内:ナデ	粗	橙	小片	突帯押圧痕
153	18-1	土師器	羽釜	C 10	S D179	径不明	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	やや粗	にぶい黄褐 黒褐	小片	
154	20-3	土師器	—	—	包含層	径不明	外:ロクロナデ→ハリツケナデ→ナデ 内:ロクロナデ→穿孔→工具ナデ	密	浅黃橙 にぶい黄橙	小片	スス付着
155	24-2	土師器	鍋	E 7	包含層	(口)32.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ナデ	密	にぶい黄褐	2/12	スス付着
156	24-1	土師器	鍋	E 7	包含層	(口)30.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ナデ	密	淡黄 褐灰	2/12	スス付着
157	24-3	土師器	鍋	E 7	包含層	(口)26.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	褐灰 黒褐	2/12	スス厚く付着
158	08-1	土師器	鍋	E 7	カクラン	(口)34.7	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	2/12	スス付着
159	18-4	土師器	鍋	A 2	包含層	(口)36.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	橙	2/12	スス付着
160	20-1	土師器	焰烙	—	—	(口)25.0	外:ヨコナデ→ナデケズリ 内:ヨコナデ→ナデ	密	浅黄橙 にぶい橙	1/12	スス付着
161	22-2	陶器	山茶椀	—	包含層	(底)6.3	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	粗	灰白 灰白	完存	モミガラ痕 裏底に墨書 濡美6型式
162	18-6	陶器	山茶椀	D 6	包含層	(底)6.8	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	9/12	濡美6型式 内面にスス付着
163	19-4	陶器	山茶椀	D 10	包含層	(底)7.0	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	6/12	もみがら痕 濡美6型式
164	19-3	陶器	山茶椀	D 10	包含層	(底)5.8	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白	完形	モミガラ痕 内面に自然釉付着 尾張型6型式
165	21-3	陶器	山茶椀	D 6	S R176	(底)6.6	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白	完存	濡美6型式 もみがら痕
166	21-2	陶器	山茶椀	A 3	包含層	(底)6.7	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白 灰黄	完存	濡美6型式 もみがら痕
167	18-5	陶器	山茶椀	B 8	S Z171	(底)7.4	外:ロクロナデ→糸切り一貼付高台→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰 灰白	8/12	濡美5型式
168	25-6	陶器	片口鉢	D 7	包含層	(底)14.0	外:ケズリ→貼付高台→糸切痕 内:ロクロナデ	粗	灰黄	4/12	スス?付着 風化著しく不明瞭 濡美5型式
169	25-1	瓦質土器	火鉢	D 6	包含層	(高)10.0	外:ナデ→ハリツケナデ→文様→ハリツケナデ→ナデ 内:ナデ→ハリツケナデ→ナデ	密	灰	小片	外面に文様
170	19-5	陶器	擂鉢	G 13	包含層	(口)36.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	—	—	—	
171	20-2	陶器	練鉢	D 8 + E 8	カクラン	(口)34.0	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ(工具?) 内:ヨコナデ→工具ナデ	やや密	橙 灰褐	3/12	
172	22-1	陶器	折縁鉢	D 7	包含層	(口)23.8	外:施釉→ハリツケ高台→ロクロケズリ 内:施釉	やや密	淡黄 綠灰	2/12	施釉
173	20-4	陶器	輪禪皿	—	包含層	(底)5.8	外:施釉→ケズリ出し 内:施釉	密	灰白 灰白	完存	施釉 内面底に模様あり 登窯第2小期
174	19-1	陶器	丸皿	D 10	包含層	(口)11.2	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ	やや粗	灰白 灰白	6/12	施釉 志野焼 登窯第3小期
175	21-7	陶器	丸皿	D 5	包含層	(口)10.6	外:施釉→ケズリ出し高台 内:施釉	やや密	灰白	5/12	施釉 志野皿 登窯第2小期
176	24-5	陶器	壺	E 7	包含層	(口)12.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗	にぶい褐	6/12	信楽か
177	25-3	陶器	甕	E 7	包含層	径不明	外:ナデ 内:ナデ	粗	にぶい赤褐	小片	常滑産
178	25-4	陶器	甕	D 7	包含層	径不明	外:ナデ 内:ナデ→オサエ	やや粗	灰赤	小片	常滑産
179	19-2	青磁	椀	D 10	包含層	(底)3.9	外:面取り→割り出し高台 内:ロクロナデ	密	灰白	3/12	
180	21-4	陶器	徳利	D 6	包含層	(底)14.6	外:ロクロ水引き→ロクロナデ 内:ロクロ水引き	密	褐灰 灰白	3/12	大窓頃か
181	23-1	石造物	一石五輪塔	D 7	包含層	(高)12.7	—	—	—	完形	
182	21-5	陶器	天目茶碗	E 7	包含層	(口)10.0	外:ロクロケズリ→ケズリ出し高台 内:	密	淡黄 黒褐	3/12	登窯第2小期
183	21-6	陶器	天目茶碗	—	包含層	(底)4.0	外:施釉→ロクロケズリ→ケズリ出し 内:施釉	密	灰白 黑	完存	施釉 登窯第4小期
184	25-2	陶器	鉄絵鉢	D 5	包含層	径不明	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰	小片	施釉 登窯第2か3小期
185	24-4	陶器	はかま香炉	D 6	包含層	(内)10.0	外:釉→ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰白	小片	古瀬戸後ⅡかⅢ期

第3表 出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	種別	名称	グリッド	遺構・層名	取り上げ番号	計測値(cm)	材質	備考	特記事項
39	027-1	井戸枠 部材	角材	B12	S E184	No.6	長さ62.5、幅5.9、厚さ4.9			
40	027-2	井戸枠 部材	角材	B12	S E184	No.7	長さ61、幅5.7、厚さ4.9			
41	027-3	井戸枠 部材	角材	B12	S E184	No.21	長さ58.7、幅6.9、厚さ5.0			
42	027-4	井戸枠 部材	角材	B12	S E184	No.22	長さ63.0、幅7.0、厚さ5.0			
43	031-1	井戸枠 部材	板材	B12	S E184	No.20	長さ69.3、幅10.6厚さ1.4		板目取り	
44	037-1	井戸枠 部材	板材	B12	S E184	No.17	長さ75、幅36.5、厚さ3.65			
45	036-1	井戸枠 部材	板材	B12	S E184	No.19	長さ107.8、幅30.5、厚さ6.0			
46	034-1	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.5	長さ77.4、幅13.75、厚さ2.55		板目取り	
47	034-2	井戸枠 部材	板材	B12	S E184	No.5	長さ64.1、幅13.75、厚さ1.15		板目取り	
48	030-1	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.1	長さ74.4、幅11.0、厚さ1.2			
49	038-1	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.3	長さ75、幅26、厚さ4.6		板目取り	
50	030-2	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.2	長さ71.6、幅11.2、厚さ1.0			
51	039-1	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.4	長さ79.1、幅32.1、厚さ4.0			
52	033-2	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.9	長さ80.7、幅13.6、厚さ2.5		板目取り	
53	032-2	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.16	長さ90.7、幅12.6、厚さ4.5			
54	036-2	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.15	長さ114.3、幅20.3、厚さ5.0			
55	030-4	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.8	長さ76.8、幅10.5、厚さ1.5			
56	033-1	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.12	長さ100.3、幅16.3、厚さ2.8		板目取り	
57	030-3	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.11	長さ76.5、幅11.5、厚さ1.0			
58	037-2	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.10	長さ73.3、幅23.5、厚さ3.0			
59	038-2	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.25	長さ73.6、幅26.2、厚さ3.7		板目取り	
60	035-2	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.26	長さ74.7、幅14.5、厚さ3.0		板目取り	
61	031-2	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.28	長さ74.8、幅9.9、厚さ1.75		板目取り	
62	035-1	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.27	長さ70.3、幅14.0、厚さ2.5		板目取り	
63	031-3	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.29	長さ62.1、幅5.9、厚さ2.55		板目取り	
64	031-4	井戸枠 部材	添板	B12	S E184	No.30	長さ74.6、幅11.2、厚さ0.75		板目取り	
65	032-1	井戸枠 部材	縦板	B12	S E184	No.31	長さ84.7、幅11.8、厚さ4.5			
66	028-2	井戸枠 横棟	角材	B12	S E184	No.14	長さ63.4、幅8.5、厚さ6.5	ヒノキ科アスナロ科		
67	029-2	井戸枠 横棟	角材	B12	S E184	No.18	長さ64.1、幅7.8、厚さ5.4	ヒノキ科アスナロ科		
68	029-1	井戸枠 横棟	角材	B12	S E184	No.23	長さ70.9、幅8.1、厚さ6.8	ヒノキ科アスナロ科		
69	028-1	井戸枠 横棟	角材	B12	S E184	No.8	長さ70、幅7.5~9.5、厚さ7.3	ヒノキ科アスナロ科		
70	041-1	曲物	曲物	B12	S E184	No.32	口径53~54、高さ37.3	スギ科スギ属スギ		
71	040-1	曲物	曲物	B12	S E184	No.33	口径46.7、高さ34.9、	スギ科スギ属スギ		
72	042-1	曲物	曲物	B12	S E184	No.24	口径23, 0、高さ12.7			
73	049-2	曲物	底板	B12	S E184	No.24	最大径18.2、厚さ0.9	ヒノキ科アスナロ属	8 5の底板	
74	049-1	曲物	底板	B12	S E184		最大径15.6、厚さ0.6	ヒノキ科アスナロ科		
75	048-2	曲物	底板	B12	S E184		復元径約20、厚さ0.7			釘穴あり
76	048-1	曲物	底板	B12	S E184		厚さ0.9			
77	047-1	曲物	底板	B12	S E184		復元径約21、厚さ0.5			
78	46-3	曲物	底板	B12	S E184		厚さ0.6			

第4表 木製品観察表(1)

番号	実測番号	種別	名称	グリッド	遺構・層名	取り上げ番号	計測値(cm)	材質	備考	特記事項
79	46-2	曲物	底板	B12	S E184		復元径21.5、厚さ0.4			
80	47-2	曲物	底板	B12	S E184		復元径21、厚さ0.9			
81	046-1	曲物	底板	C15.16	S E182		径19.9、厚さ1.2			
82	043-1	井戸枠 部材	板材	C15.16	S E182	No.1	長さ71.3、幅16.6、厚さ5.2	マツ科モミ属		
83	043-3	井戸枠 部材	板材	C15.16	S E184	No.3	長さ72.2、幅13.7、厚さ4.5	マツ科モミ属		
84	043-2	井戸枠 部材	板材	C15.16	S E184	No.4	長さ72.2、幅12.2、厚さ4.5	マツ科モミ属		
85	043-4	井戸枠 部材	板材	C15.16	S E184	No.5	長さ72.9、幅13.4、厚さ5.2	マツ科モミ属		
86	043-5	井戸枠 部材	板材	C15.16	S E184	No.8	長さ73.5、幅12.8、厚さ4.7	コウヤマキ科コウヤマキ属		
87	044-1	曲物	曲物	C15.16	S E182	No.6	口径51~63、高さ37.5	ヒノキ科アスナロ属		
88	045-1	曲物	曲物	C15.16	S E182	No.7	口径43~48、高さ36.6	ヒノキ科アスナロ属		

第5表 木製品観察表(2)

遺構番号	性 格	時 期	次数	グリット	特徴・形状・計測数値など
S D170	溝	中世	3次	B10~C9	山茶椀、土師器鍋など出土 2次調査B地区S D66に接続
S Z171	落ち込み	中世	3次	B・C9	山茶椀、土師器鍋など出土
S E172	井戸	中世か	3次	C5	
S Z173	落ち込み	中世	3次	B3・4 C5・6	山茶椀、土師器鍋など出土
S K174	土坑	中世	3次	C5	山茶椀出土
S D175	溝	中世	3次	B6~7	
S R176	流路	中世	3次	B2・C3~7・D4 ~10・E6~8	三泗川の落ち込み、近世に人為的に盛土して、整地される。
S E177	井戸	中世	3次	C7	
S Z178	溝	近世	3次	A10~12・B10~12	陶器出土 第2次調査B地区S D57に接続
S D179	溝	中世	3次	C10	羽釜出土
S D180	溝	中世	3次	B12	青磁出土
S R181	流路	中世	3次	B13・C12~13・D 11・12	2次調査B地区のS D57に接続か
S E182	井戸	中世前期	3次	C15	井戸枠出土、曲物良好に残存
S K183	土坑	中世	3次	E13	
S E184	井戸	中世前期	3次	B12	井戸枠出土、曲物良好に残存
S D185	溝	中世	3次	F14・15	

第6表 里前遺跡(第3次) 遺構一覧表

# V 結 語

## 1 遺跡の動向について

里前遺跡は今回の調査で3回目の調査である。ここではこれまでの調査成果を踏まえ、この遺跡の性格について若干検討したい。

弥生～古墳 第2次調査は3次調査区の西側を中心に場所を隔てて調査が行われている<sup>①</sup>。C地区では弥生時代後期末頃の方形周溝墓、A地区では環濠の可能性も考えられる溝状の落ち込みがそれぞれ確認されている。今回の調査では三泗川の落ち込みの箇所で若干の弥生土器が出土しているが、遺構は確認されていない。しかし、居住域こそ未確認であるが、周辺に集落が存在する可能性は充分に考えられる。

### 中世

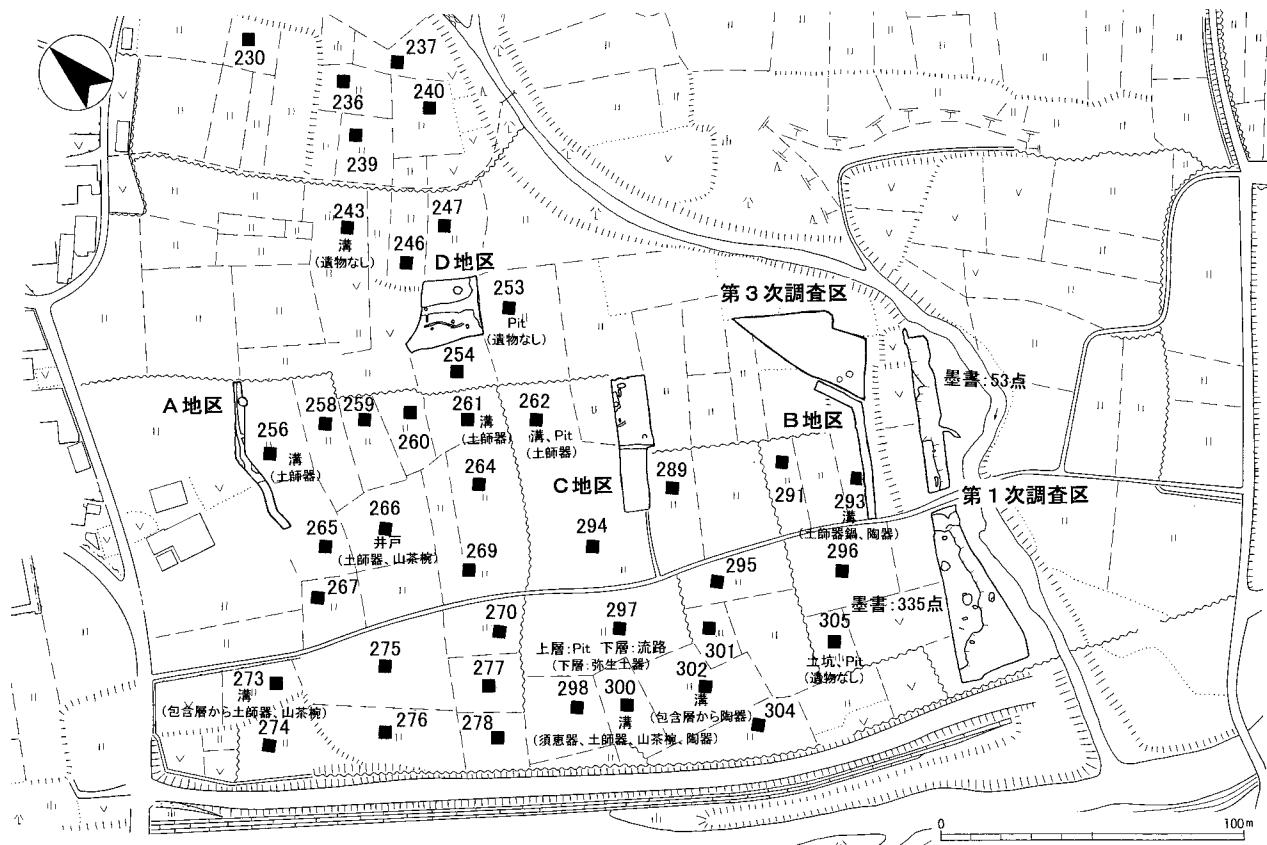
第1次調査は、今回の調査区の東から南にかけて行われた<sup>②</sup>。三泗川への落ち込みから中世前期の大量の陶器供膳具が投棄されて出土している。報告によれば、重要な点として山茶椀といった陶器の使用痕の分析から、使用痕がみられるものが7割を占め、

使用痕の無いものは1割強であったこと。墨書に記された文字の分析から、米に関連する墨書が多く確認され、年貢集配に関わっている可能性が示唆されている<sup>③</sup>こと。狭い空間に多くの井戸が造られている点などが挙げられている。第2次調査区のA・C・D地区では溝・土坑・井戸・土坑墓が確認されており周辺に集落跡が存在した可能性が高い。とりわけ、C・D地区ではピットが多数検出していることに加え、土坑墓が基ほど確認されていることは注目できる。試掘結果も参考にすると、図のトーン部分に遺構が確認されており、比高も周辺より高いため、この区域に居住域が存在している可能性が考えられよう。

### 近世

C地区を中心に溝が確認されている。今回の第3次調査区では、近世段階に三泗川沿いの落ち込み部分を盛土によって整地していることが判明している。

住居跡は確認されていないが、1次調査区の南端部の上層でピットが確認されており、出土遺物より



第19図 里前遺跡調査区と周辺の試掘状況図 (1:2,500)

登窯第5～6小期、18世紀中頃まで、居住域が存在していた可能性が高い。

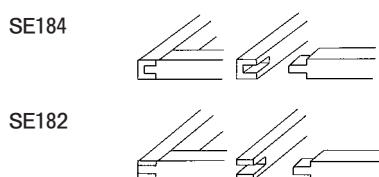
## 2 井戸について

井戸の断ち割りの結果SE182・184からは良好な木組みの井戸を検出できた。ここでは各井戸の構造を検討<sup>④</sup>する。

SE184は側枠内面の四隅に隅柱を配しており、宇野隆夫氏の分類による「縦板組隅柱横桟どめ式」に相当し、SE182に関しては「横桟どめ式」ではあるが縦板が1枚板である点でやや異形である。これらの井戸の前後関係については出土した山茶椀より、SE184がやや先行して造られたものとみられるが、両者の縦板・横桟の構造を比較すると、SE182の縦板は1枚板であるのに対し、SE184は数枚の縦板の外側に添板を配している。また、横桟についても、前者が丸木をそのまま裁断して仕口を小都隆氏の分類の「目違い柄」に加工するが、後者は部材を面取りしたうえで、仕口を「目違い柄の凹柄が貫通しない」ものに加工しており、SE184の方が精巧な造りになっておりSE182に関しては全体の造りが簡略化している。

1次調査区では狭い空間に11基の井戸が存在したが、中世前期に限定すれば7基で、その殆どは素掘りで、木組の井戸は2基であった。井戸が多いにも関わらず素掘りが大半である一方、第3次調査区では精巧な木組みのが存在し、隣接する2次調査区B地区でも木組みの井戸が存在することから、1次調査区部分とは性格が異なることも想定されよう。

これまで、県内でも多くの中世集落遺跡が調査されており、木組の井戸も多数確認<sup>⑤</sup>されている。しかしながら、木組の井戸については遺存度に左右されるため、井戸枠の構造を明確にとらえることが困難な場合もあって、その様相については不明な点が多くあった。近年、県内でも、中世集落遺跡が調査され、



第20図 木組井戸横桟の組方模式図

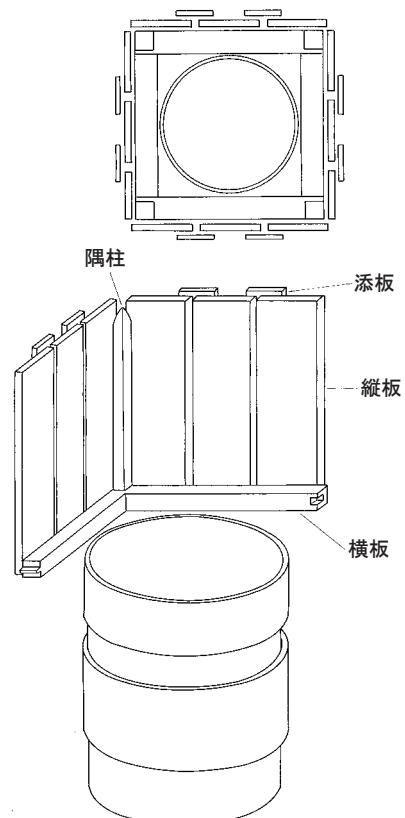
木組井戸も多数確認されている。今後はこれらの出土例を蓄積したうえで、集落内における配置や、木組井戸と石組との使い分けの問題、時期的な構造の変遷などについて明らかにしていく必要があろう。

## 3 出土土器の傾向

第3次調査からは主に中世～近世の土器が出土している。遺構には中世と近世の遺物が混入しているものが殆どであるため、土器の組成比のデータを得ることは出来なかった。しかしながら図化している土器の時期や産地についてみると、山茶椀は尾張産と渥美産がほぼ二分するような比率であり、近世の遺物も登窯第2～3小期の範疇におさまるものが殆どである。器種についても第1・2次調査とは弥生時代の土器が極端に少ない点を除けばおおむね似通った様相である。

## 4 里前遺跡の評価について

今回の調査では13世紀を中心とした時期と16世紀を中心とした時期に大別され、第1・2次と同様の傾向を示している。しかし、遺構は三泗川の河岸に造られた井戸と、ピットの検出に留まった。出土遺



第21図 井戸 S E184組方模式図

物は破片資料が大半で残りも悪い。また、墨書き土器も微量である。1次調査区で確認されたような大量の山茶椀が投棄されている所以を知りうる有力な成果は得ることが出来なかった。

当遺跡については安濃川と三泗川との合流地点という地理的な立地と、大量の山茶椀の出土から、安濃津を経由して物資が集積した第2次集積地ではないかとの指摘<sup>⑥</sup>がある。しかし、使用痕と墨書き土器を検討した川崎志乃氏によれば、集積地としての可能性を認めつつも、年貢徵収に関わる作業が行われた可能性を指摘<sup>⑦</sup>しており、集散地として機能していたという明確な痕跡の抽出は困難であるとしている。

また、これまでの調査において当遺跡では、井戸をはじめピット・土坑墓等の遺構は確認されおり、人々のこの地での活動の痕跡は認められるものの、掘立柱建物といった建物・住居跡は明確ではない。当然、遺跡内のごく一部の調査の為、集落域が未調査部分に存在する可能性は充分にあるが、おびただしい量の山茶椀が出土したことを鑑みても、井戸・溝以外の遺構が確認できない。従って集散地遺跡について、今後は遺構からの検討も必要である。残念ながら、今回の調査においても、この遺跡の性格を窺い知ることができるような成果が確認できなかつたが、中世の物流を考えるうえで重要な遺跡であり、今後の調査によって解明されることが期待される。

(豊田祥三)

#### [註]

- ①水谷豊・酒井巳紀子ほか『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2005年）
- ②川崎志乃『里前遺跡発掘調査報告』（「一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う」三重県埋蔵文化財センター 2002年）
- ③註②と同じ
- ④井戸については以下の文献を参考にした。  
宇野隆夫「井戸考」（『史林』第65巻第5号 史学研究会 1982年）  
小都隆「草戸千軒の井戸」（考古学研究第26巻第3号、考古学研究会1979年）  
岩本正二「井戸」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996年）  
北村和弘「尾張平野における中世井戸の構造とその変遷に関する覚書『年報一平成8年度』」（財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997年）  
替田遺跡の第4次調査のF地区では、木組みの井戸が出土しており、井戸枠の構造が復元されている。
- ⑤宮田勝功『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2004年）
- ⑥なお伊藤裕偉氏は里前遺跡の山茶椀の分析で未使用品の割合を56%と指摘している。  
伊藤裕偉「中世における集散地遺跡の分析」（『考古学ジャーナル』478 ニュー・サイエンス社 2001年）
- ⑦註②と同じ

調査年度	調査遺跡	調査面積	報告書		
			発行所	発行年	参考文献
1996	替田遺跡（第1次）	6,620	県埋文センター	1997	『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報IX』
1997	替田遺跡（第2次）	3,140	県埋文センター	1998	『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報X』
1997	武ノ坪遺跡	5,100	県埋文センター	1998	『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報X』
1998	里前遺跡	1,280	県埋文センター	2002	『里前遺跡発掘調査報告』
1999	替田遺跡（第3次）	80	県埋文センター	2001	『神戸遺跡（第2次）・替田遺跡（第3次）発掘調査報告』
1999	替田遺跡（第4次）	1,680	県埋文センター	2004	『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』
2000	惣作遺跡	1,300	県埋文センター	2002	『惣作遺跡発掘調査報告』
2000	里前遺跡（第2次）	1,300	県埋文センター	2005	『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』
2001	惣作遺跡（第2次）	400	県埋文センター	2002	『惣作遺跡（第2次）発掘調査報告』
2001	替田遺跡（第5次）	1,450	県埋文センター	2006	『替田遺跡（第5～8次）発掘調査報告』
2001	武ノ坪遺跡（第2次）	400	県埋文センター	2006	『替田遺跡（第5～8次）発掘調査報告』
2002	替田遺跡（第6次）	2,858	県埋文センター	2006	『替田遺跡（第5～8次）発掘調査報告』
2002	里前遺跡（第3次）	988	県埋文センター	2006	『里前遺跡（第3.4次発掘調査報告）』
2003	替田遺跡（第7次）	1,403	県埋文センター	2006	『替田遺跡（第5～8次）発掘調査報告』
2003	里前遺跡（第4次）	260	県埋文センター	2006	『里前遺跡（第3次発掘調査報告）』
2004	替田遺跡（第8次）	1,583	県埋文センター	2006	『替田遺跡（第5～8次）発掘調査報告』

第7表 里前遺跡周辺調査一覧

# 写 真 図 版



里前遺跡遺構(1)



全景（西から）



東部全景（西から）

図版2

里前遺跡遺構(2)



調査前風景（西から）



調査前風景（東から）

里前遺跡遺構  
(3)



作業風景（南西から）



S E184 断ち割り土層断面（東から）

図版4

里前遺跡遺構(4)



S D170 (南から)



S R181 (南から)

里前遺跡遺構(5)



S E184 井戸枠（東から）



S E184 (西から)

図版 6

里前遺跡遺構(6)

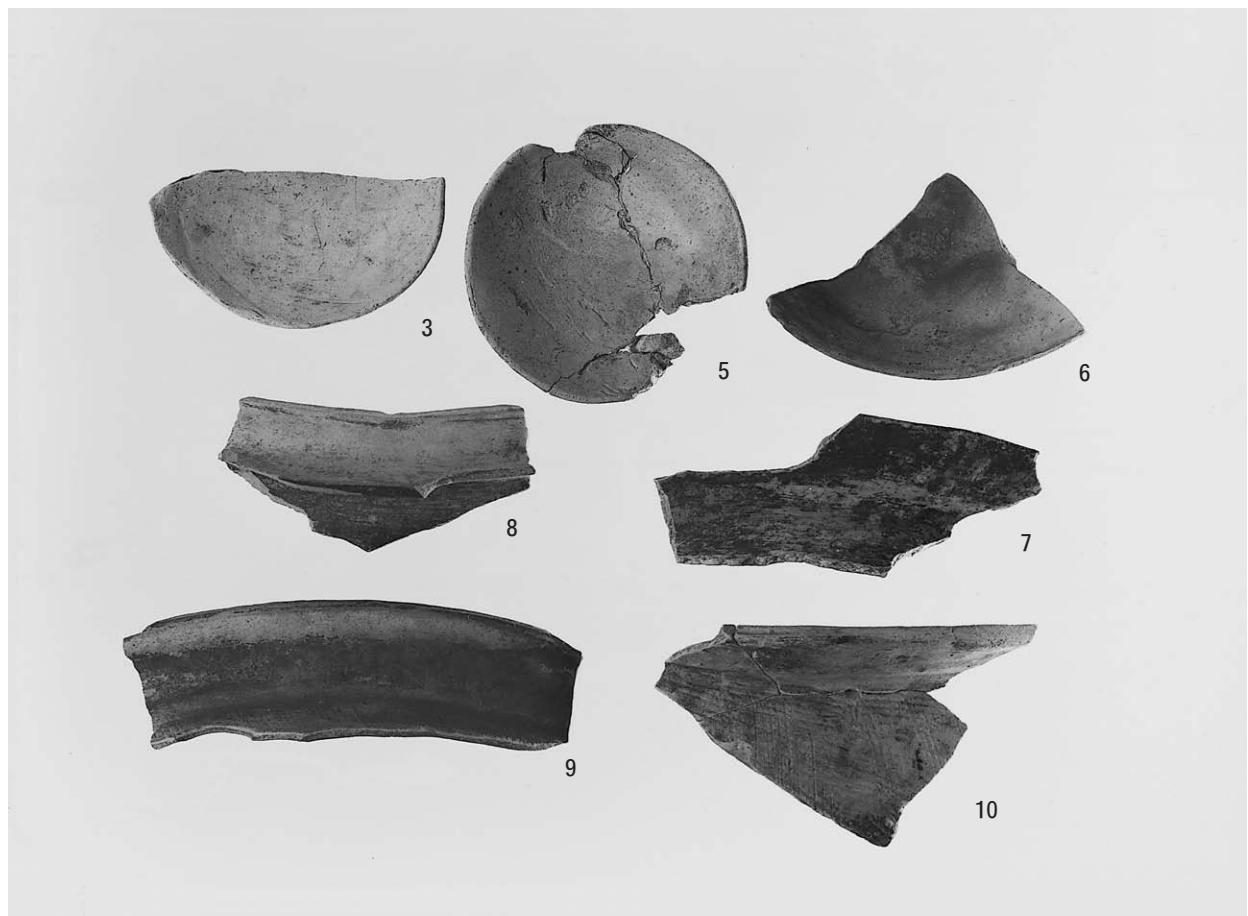


S E182 断ち割り土層断面（東から）

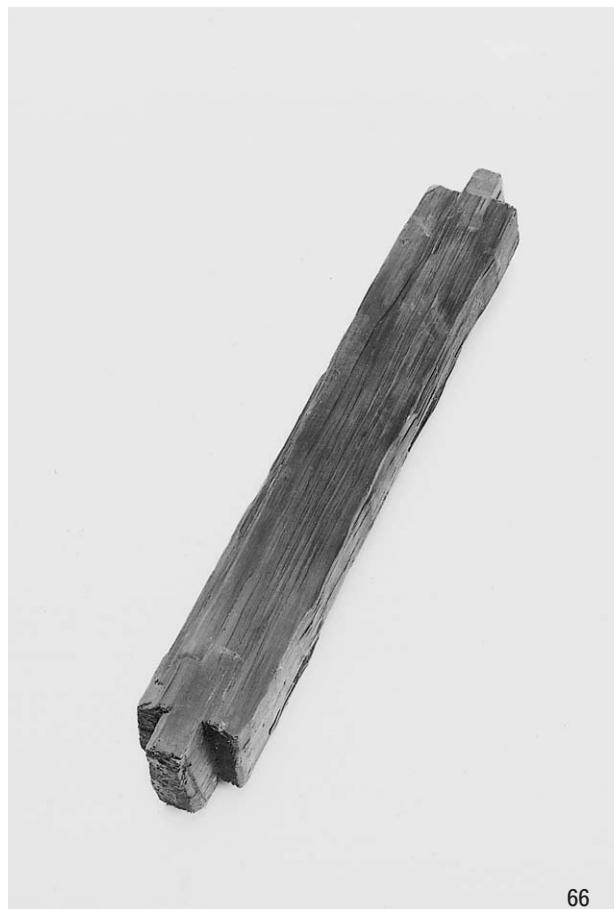


S E182（東から）

里前遺跡遺物(1)



41



66

図版8

里前遺跡遺物(2)



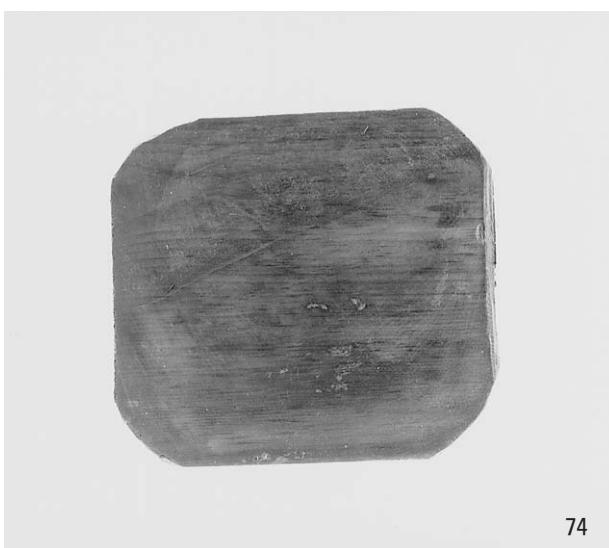
67



68



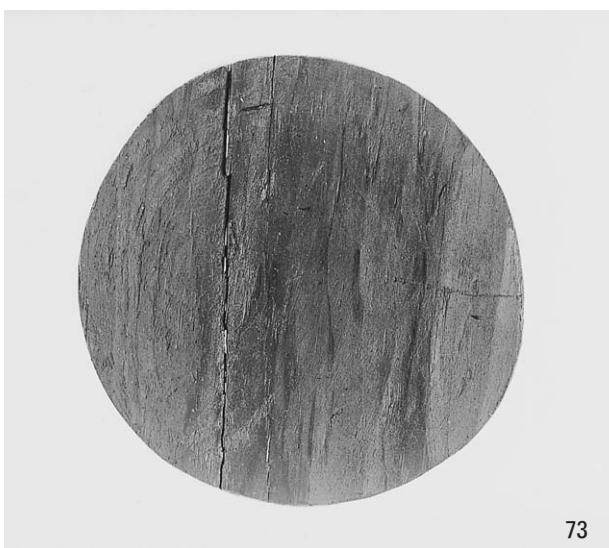
70



74



71



73



83



89



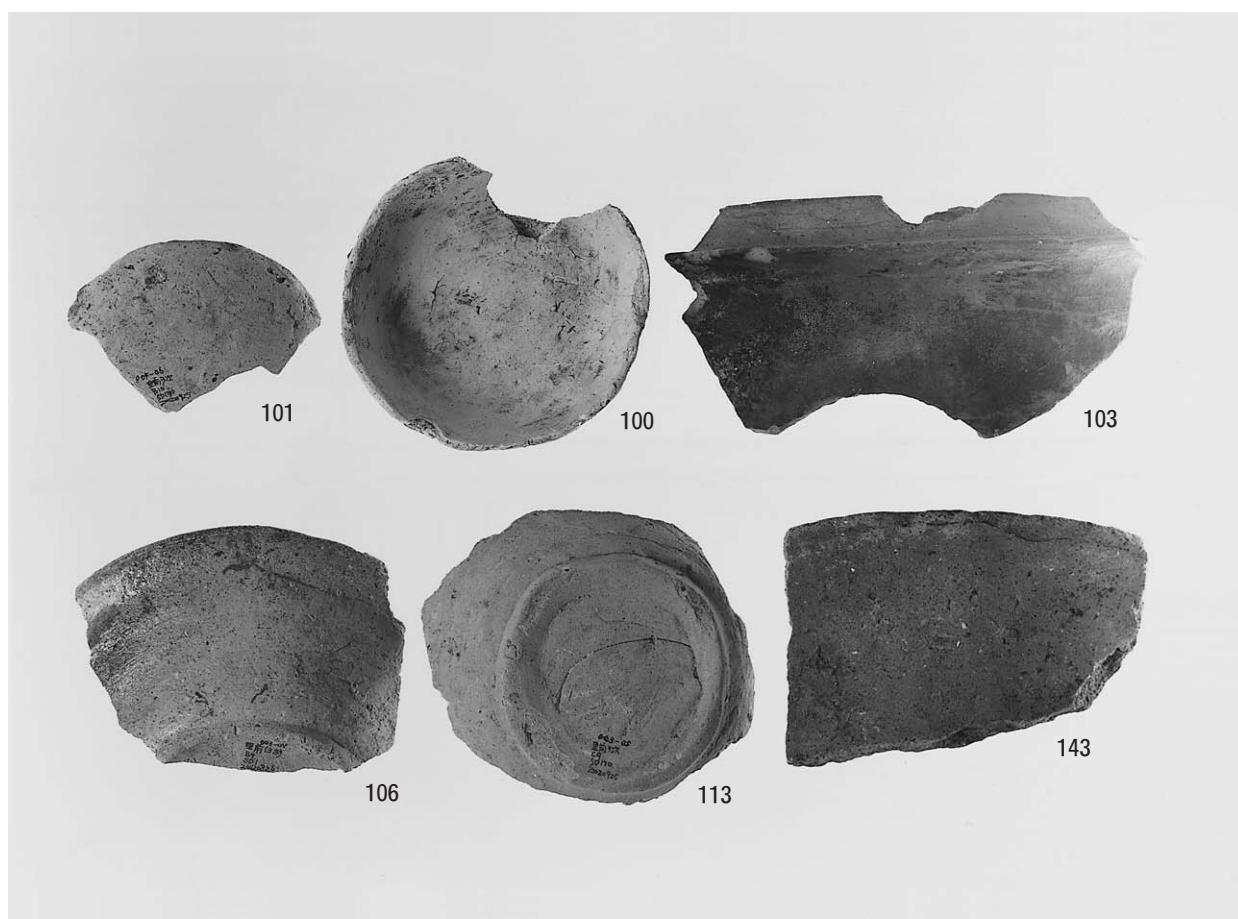
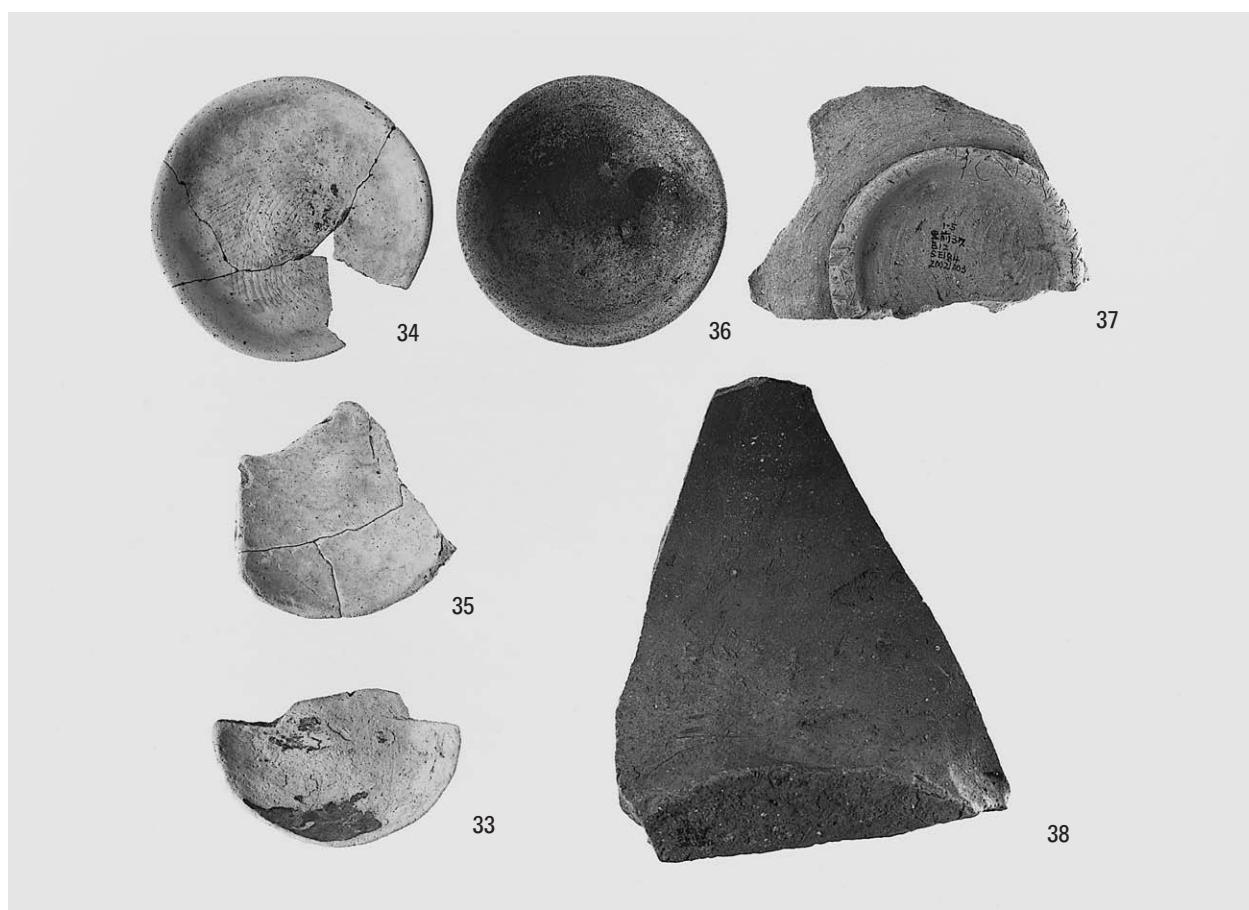
82



90

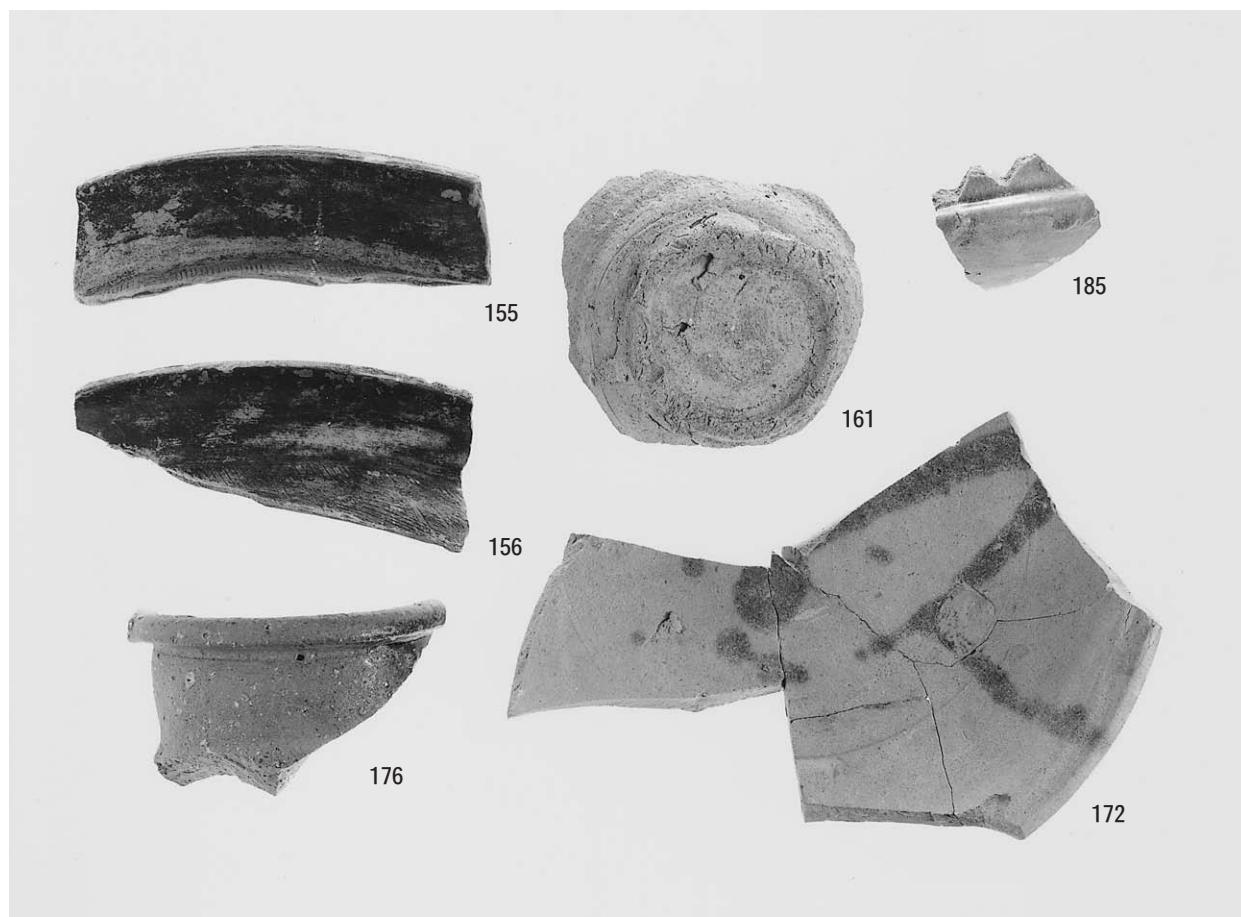


里前遺跡遺物(5)



図版 12

里前遺跡遺物(6)



# 附編1 里前遺跡（第4次）発掘調査報告

## 1 調査の経緯

平成14年度二級河川安濃川（三泗川工区）基幹河川改修宅地関連公共施設整備（広域基幹）事業に伴って、ほ場整備地内上水道関連施設の改修工事のために、約260m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。調査は平成15年2月3日～同7日までに上水本管設置部分の調査を、また17日に仮設のバイパス管設置部分の追加調査を実施した。

## 2 位置と環境

調査地は、安濃川と岩田川をつなぐ三泗川が岩田川合流直前で大きく蛇行する右岸に位置する。周辺では中勢道路に伴う事前の発掘調査、また県営ほ場整備事業および国道163号線バイパスの建設工事に伴う発掘調査を行っており、この集中した開発事業の実施により替田遺跡・式ノ坪遺跡・里前遺跡・神戸遺跡などで弥生時代～中世にいたる集落跡の実態が解明されつつある。当該地は所在するのは小字「浜垣内」であるが、里前遺跡に隣接し、1～3次までの調査、また現況地形の観察から里前遺跡の集落跡の一端であることが予想されたため、「里前遺跡」と

して調査を実施することとなった。

## 3 遺構・遺物

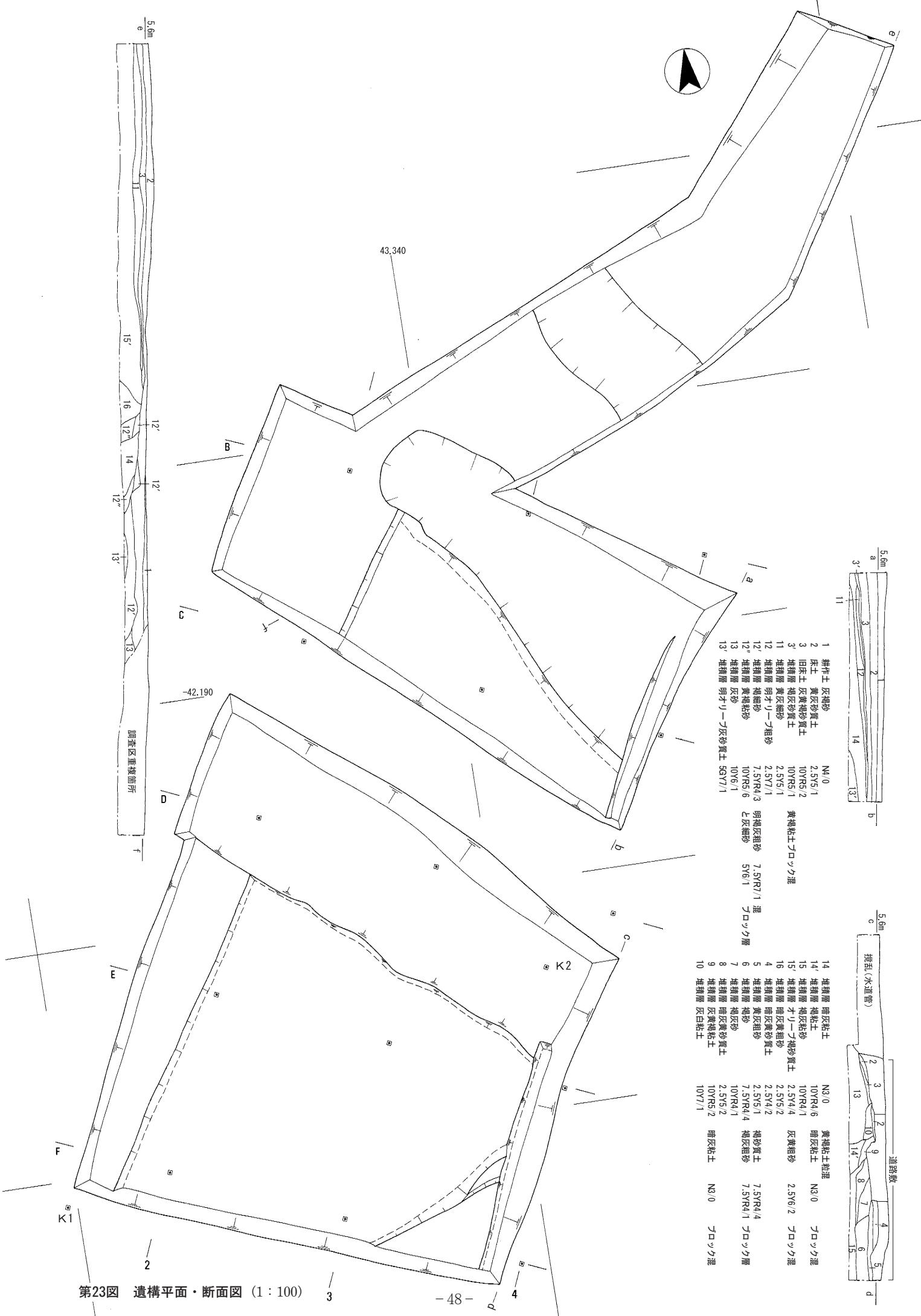
調査区では、南端でわずかに安定した面と北半は三泗川が一時期氾濫したときの流路となった旧河川跡が検出できた。出土遺物は、南の安定面上層からわずかに中世土師器片と山茶碗片が出土したのみで、旧河川跡からの出土遺物はなかった。安定面にも遺構は検出されず、調査地以南において遺構・遺物を伴う集落跡の生活面が存在するものと考えられる。また、流路は南西に向けて川幅をやや細めながら南流していたことがわかった。この流路北端ではかなり長期間低湿地であったことをうかがわせる泥炭層が検出された。流路以北は砂堆で、かなり粗目の川砂面が広がっており、安定した生活面は認められなかった。

## 4 まとめ

上記の調査結果から、当該地は3次調査までの里前遺跡から続く、集落跡が立地する安定堆積層の北端が確認されたものと考えられる。  
(大川)



第22図 調査区位置図 (1:500)



第23図 遺構平面・断面図 (1: 100)



調査区全景（北東から）



北東調査区（北東から）

## 附編2 梁瀬遺跡工事立会報告

### 1 位置と環境

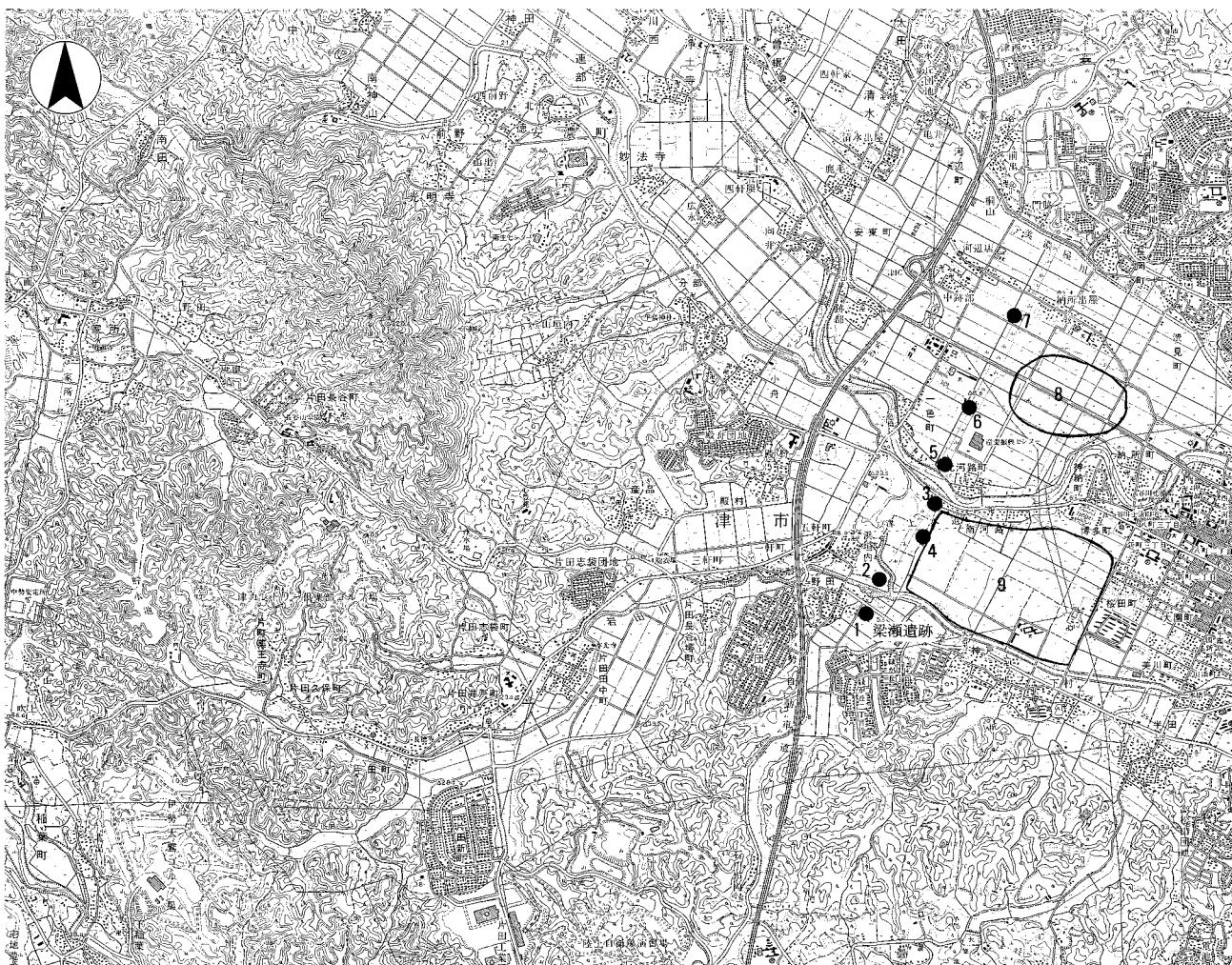
今回の対象地は、岩田川に架けられた五五六橋の直ぐ東側の右岸沿いである。梁瀬遺跡<sup>①</sup>（1）は岩田川右岸の沖積地に位置し、遺跡範囲が東西300m・南北350mの広範囲にわたる。平成10年度に一般国道23号中勢道路建設に伴う発掘調査で掘立柱建物をはじめとして道路状遺構、井戸、溝、旧河道が確認されている。おおよそ平安時代から鎌倉時代に属する。遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗、白磁など多彩なものが出土している。近隣域で発掘調査された遺跡を見ておきたい。梁瀬遺跡から岩田川を挟む北岸には一般国道23号中勢道路建設事業に伴う発掘調査で里前遺跡<sup>②</sup>（2）、替田遺跡<sup>③</sup>（3）、式ノ坪遺跡<sup>④</sup>（4）、蔵田遺跡<sup>⑤</sup>（5）、位田遺跡<sup>⑥</sup>（6）、松ノ木遺跡<sup>⑦</sup>（7）などがある。

また、梁瀬遺跡のほぼ北東2kmには弥生時代の著名な遺跡である納所<sup>⑧</sup>遺跡（8）が所在している。さらに、梁瀬遺跡の東1kmには広大な面積を有する神戸遺跡<sup>⑨</sup>（9）が所在している。

なかでも里前遺跡は平成12年度に津中部地区県営ほ場整備事業でも発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期、鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されている。なお替田遺跡や式ノ坪遺跡も同事業によって発掘調査が行われている。

### 2 遺構

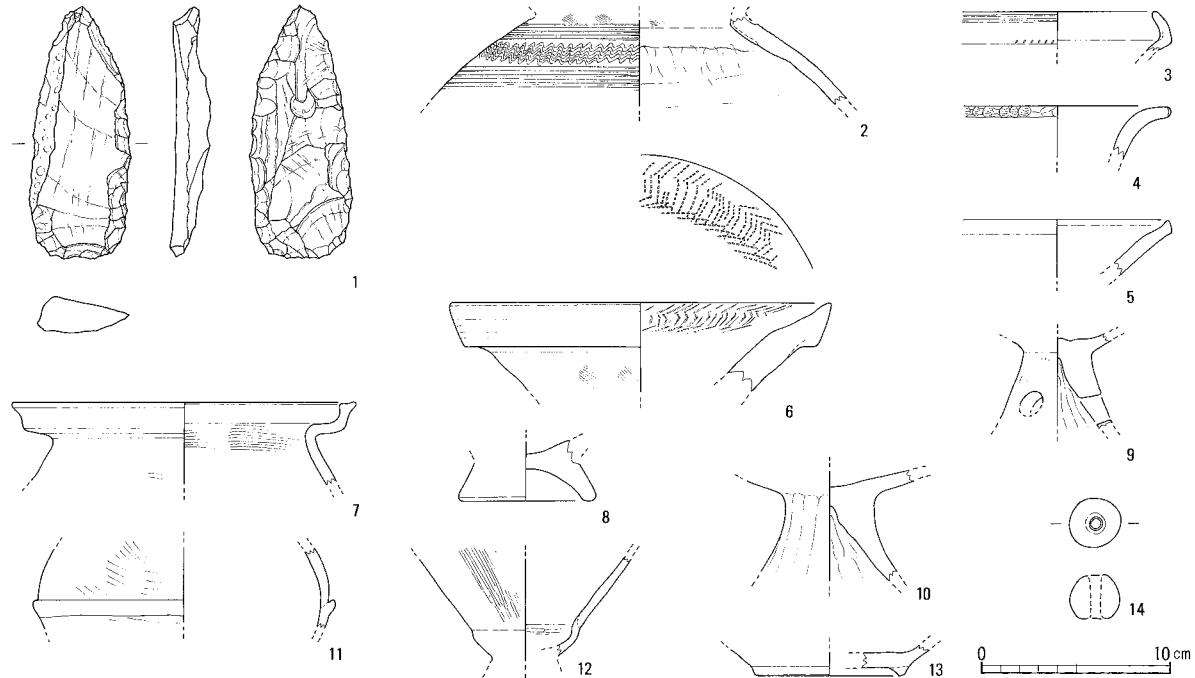
対象面積は、約850m<sup>2</sup>である。調査坑は、4×2mのトレンチを3箇所、4×4mのトレンチを1箇所設定した。各トレンチは、No.1～4の番号を付し、掘削した。No.1及び2では、遺構・遺物共に確認で



第24図 遺跡位置図 (1/50,000) 『この地図は、国土地理院発行「津西部」(1/25,000) を掲載したものである』

きなかった。No. 3 では、表土直下30cmで遺物包含層にあたる。表土下120cmで流路の肩部とみられる部分を確認した。そのため北側に2 m拡張した。その結果、流路が南東から北西方向へ流れ岩田川と合流していたと判断される。また、No. 4 は、No. 3 から約 7 m 程度離れて東側で掘削した。表土下130cmで流路の肩部とみられる一部を確認した。No. 3 で確認された流

路と同一であろうとみられる。流路幅は、ほぼ 7 m 前後をはかるものとみられる。遺物の多くはNo. 3 の流路の埋土から出土しているが北西方向の合流地点に向かうほど遺物の出土量は減少した。ただ、同一の流路と判断したNo. 4 では、遺物はほとんど出土していない。



第25図 出土遺物実測図

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口 径 (cm)	器 高 (cm)	その他 (cm)	調整技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存	備 考
1	003-01	石器 削器	流路	長さ 6.6	幅 2.7	厚さ 1.1	—	—	—	—	ほぼ完形	重さ18.65g
2	002-02	弥生土器 壺	流路	—	残高 4.6	—	内面：指オサエ後ナデ 外面：ナデ後描文と波状文	密	—	橙色 5YR6/6	体部僅少	
3	002-06	弥生土器 壺	流路	—	残高 1.7	—	内面：ナデ 外面：ナデ、キザミ	密	—	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部 一部	体部外面に墨書き有り
4	002-04	弥生土器 壺	流路	—	残高 2.8	—	外面：ナデ	密	—	灰黄色 2.5Y7/2	口縁部 一部	
5	002-05	土師器 壺	流路	—	残高 3	—	外面：風化著しく調整不明	密	—	内面：にぶい黄橙色 10YR7/4 外面：橙色 7.5YR6/6	口縁部 一部	
6	002-03	土師器 壺	流路	20.1	残高 4.6	—	内面：ナデ後刺突文 外面：ナデ、ハケ	密	—	浅黄橙色 10YR8/3	口縁部 約20%	
7	002-01	土師器 壺	流路	18.1	残高 4.4	—	内面：ナデ、ハケ、口縁部横ナデ 外面：ナデ、ハケ	密(微妙粒含む)	—	内面：灰白色 10YR8/2 外面：にぶい黄橙色 10YR7/2	口縁部 約10%	
8	001-04	土師器 台付壺	流路	—	残高 3.15	底径 7.3	外面：風化のため調整不明	密(微妙粒含む)	—	内面：橙色 5YR7/6 外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	台部のみ	
9	001-03	土師器 高杯	流路	—	残高 4.9	—	内面：剥離しており調整不明 外面：ミガキ？	密	—	橙色 7.5Y7/6	脚部のみ	
10	001-02	土師器 高杯	流路	—	残高 5.8	—	内面：ナデ 外面：ナデ、面取りナデ	密	—	灰白色 2.5Y8/1	脚部のみ	
11	001-06	弥生土器 手焙形	流路	—	残高 4.2	—	内面：風化著しく調整不明 外面：ハケ	密	—	浅黄橙色 10YR8/3	僅少	
12	001-05	土師器 脚付鉢	流路	—	残高 5.3	—	外面：ミガキ	密	—	内面：にぶい橙色 7.5YR7/4 外面：浅黄橙色 7.5Y8/4	10%	
13	001-01	陶器 椀 (山茶椀)	流路	—	残高 1.7	高台径 7.9	内面：ロクロナデ 外面：系切痕跡残る、高台貼り付け後ナデ、ロクロナデ	密	良	灰黄色 2.5Y7/2	底部10%	
14	002-07	土錐	流路	縦 2.3	横 2.7	穴径 0.6	—	密	—	褐灰色 10YR5/1	完形	重さ15g

第8表 出土遺物観察表

### 3 遺物

遺物は、コンテナバット約1箱程度出土した。遺物は、大半が流路内からの出土である。遺物の種類は、石器（削器）、縄文土器、弥生土器、土師器で占められている。実測できるものを中心には掲載した。遺物は、削器（1）、弥生土器壺（2・3）、甕（4）、土師器壺（5・6）、土師器甕（7・8）、高杯（9・10）、手焙形（11）、台付埴（12）、陶器椀（13）、土錐（14）が出土している。遺物の時期は、流路からの出土であるため、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてである。石器は、縄文時代のものである。

#### 〔註〕

- ①宮田勝功・村木一弥「梁瀬遺跡」（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報11』三重県埋蔵文化財センター 1999年）
- ②川崎志乃「一般国道23号中勢道路建設事業に伴う里前遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2002年）  
水谷豊・酒井巳紀子「里前遺跡（第二次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2005年）
- ③池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第1次）」（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報IX』三重県埋蔵文化財センター 1997年）  
水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「替田遺跡（第2次）」（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報X』三重県埋蔵文化財センター 1998年）
- 河北秀実・柴山圭子・筒井英俊「神戸遺跡（第2次）・替田遺跡（第3次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2001年）

1は、削器である。石の材質は、安山岩質サヌカイトで二上山産出のものとみられる。

### 4 まとめ

今回の調査地では、流路とみられる溝の肩部分の一部を確認できた。その他に遺構は、確認できなかつた。流路とみられる部分から弥生土器が出土した。しかしながら、遺物が出土していることから梁瀬遺跡内とみられ、遺跡の縁辺部と判断される。遺跡の中心は南西側に広がることが想定され、今後の調査による成果で遺跡の実態が判明することが期待される。

（萩原義彦）

宮田勝功「替田遺跡（第4次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2004年）

- ④中川明・川崎志乃「武ノ坪遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2005年）
- ⑤米山浩之・宮田勝功「一般国道23号中勢道路建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 1999年）
- ⑥米山浩之「一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 1999年）  
中村光司「位田遺跡（第2次）発掘調査報告」（津市教育委員会 2002年）
- ⑦竹内英昭「松ノ木遺跡」（『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年）』
- ⑧伊藤久嗣他「納所遺跡」（三重県教育委員会 1980年）
- ⑨中川明「神戸遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 1999年）

## 報告書抄録

ふりがな	さとまえいせき（だいさんじ・よんじ）はっくつちょうさほうこく							
書名	里前遺跡（第3・4次）発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	276							
編著者名	豊田祥三 大川操 萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	2006年 12月 25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
さとまえいせき 里前遺跡	つし 津市 の だ あざさとまえ 野田字里前	24201	477	136度 29分 30秒	34度 29分 30秒	20010511 ～ 20010605	988m <sup>2</sup>	河川改修
やなせいせき 梁瀬遺跡	つし 津市 の だ あざ やなせ 野田字梁瀬	24201	848	34度 43分 17秒	136度 28分 05秒	20030203 ～ 20030207	260m <sup>2</sup>	上水道関連施設 改修工事
20060511	32m <sup>2</sup>	河川改修						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
里前遺跡	集落跡	中世	井戸・溝 土坑・ピット	陶器(山茶椀・山皿・平 椀など) 木製品(井戸枠・曲物)				
		近世	落ち込み	陶器(志野焼・天目茶椀 など)				
梁瀬遺跡	集落跡	縄文～近世		縄文土器 弥生土器・石器 土師器(高杯・甕・手焙 形土器・台付咲) 陶器椀・土錘				
要約	<p>三泗川の改修に伴う調査である。今回の調査区は大量の山茶椀が出土した第1次調査区の北西側にあたる。調査の結果、調査区内の北部分は三泗川の落ち込みであったが、近世の段階で農地にするために盛土を行ったことが判明した。遺構は三泗川へ流れ込む溝・ピット、井戸を検出したが、溝・ピット遺物については中近世の遺物が混在しており時期は不明であるが、井戸のうち2基は中世前期のもので、木組みの井戸には井戸枠や曲物が良好な状態で出土している。</p> <p>調査区内では、建物跡などは確認できなかったものの、中世前期から近世までの遺構が確認されており、近辺に集落跡が展開すると考えられる。また、第4次調査区では旧河道を確認した。</p>							



---

三重県埋蔵文化財調査報告書276

**里前遺跡（第3・4次）発掘調査報告**

2006年12月発行

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 光出版印刷株式会社

---